

人類の  
救世主が  
立ち上がる  
とき

坂中英徳

目次

第一章 坂中論文の誕生

1	坂中論文の人類史的意義	2
2	坂中論文の目次	5
3	坂中論文と共に歩んだ五十年	7
4	移民政策研究の夜明けを告げる論文	9
5	移民国家日本の発想の原点——坂中論文	12
6	坂中論文の時代から人類共同体論の時代へ	14
7	坂中英徳の単数意見から国民の多数意見へ	16
8	筆一本で日本と世界の歴史を動かす	17

第二章 日本の歴史が動く

1	日本型移民政策の骨子案	22
2	多様性の豊かな社会を創ろう	24
3	日本型移民政策大綱	26

4	外国人労働者と奴隷労働者とは同根	28
5	移民の定義について	30
6	日本版奴隷制度の即時廃止を求める	33
7	国の将来を憂える憂国の徒	34
8	人口崩壊は移民国家を創建する千載一隅の機会	36
9	日本は移民の新天地として生まれ変わる	38
10	若者たちの決起を期待する	39
11	政治家の立場と革命家の立場	41
12	坂中ビジョンが世界を席卷する日	44
13	明治の革命を凌駕する令和の革命を	46
14	定住支援体制の整備が緊急の課題	48
15	世界の知識人と日本の知識人	50
16	私は「多文化共生」という言葉を使わない	51

### 第三章 身辺雑記

1	トロント大学での講演	56
---	------------	----

2	人のやらないことばかりやった……………	57
3	「小さな日本」か「大きな日本」か……………	59
4	論文三昧の日……………	61
5	自画像を語る……………	63
6	無為の人として生涯を終えたい……………	65
7	私家本を侮ってはならぬ……………	67
8	天職に殉ずる日本人……………	68
9	多彩な顔を持つ革命家……………	70
10	雌伏の時代の私は何をしていたのか……………	72
11	日本を移民開国に導く二冊の英文図書……………	74

#### 第四章 内閣総理大臣の英断を期待する

1	『Japan as an Immigration Nation』の人類史的意義……………	78
2	一九九〇年の入管法改正は移民国家への第一歩……………	79
3	一〇〇〇年後の人類社会を展望する……………	82
4	救国の魂がやどる移民国家創成論……………	83

5	移民政策研究所のホームページへのアクセス数が急増中	85
6	一刻も早く移民開国宣言を	87
7	日本滅亡の責任を誰がとるのか	89
8	環太平洋戦略的経済連携協定の歴史的意義	90
9	移民開国で日本経済は安定軌道に乗る	91

## 第五章 移民国家日本は世界の頂点をめざす

1	人類の救世主がゆく	96
2	政治家の不在が移民政策の推進力になった	97
3	日本の政治家はリベラルである	98
4	日本で移民排斥運動は起きない	99
5	移民時代の行政のあり方	101
6	人口と移民	102
7	財政と移民	104
8	移民法制の二本柱——移民法と移民協定	106
9	日本のジャーナリズムの再生はあるのか	107

10 世界は移民に壁を築く。日本は移民に扉を開く…………… 111

第六章 人事を尽くして天命を待つ

1	移民革命と日本革命の二つの革命が必要……………	116
2	世界の人々を和解に導く人類共同体思想……………	118
3	世界の碩学が英文著作の独創性を絶賛……………	119
4	日本の若者は人類史的課題に挑戦する……………	120
5	移民国家ニッポンの未来図……………	123
6	大きな夢を描けば美しい花が咲く……………	126
7	人類史を塗り替える人類共同体哲学……………	127
8	坂中ドクトリンが核戦争時代の人類の命を救う……………	128
9	二一世紀はレイシズムの問題が噴出する時代……………	131
10	米中冷戦時代の日本の果たすべき使命……………	132
11	人類は地球上から姿を消す運命にあるのか？……………	133
12	人類共同体哲学の創始者の出番が来た……………	137
13	ウクライナ難民を歓迎する人道移民大国ニッポン……………	140

14	入管法の全面改正が急がれる……………	143
15	坂中英徳が革命家に指名された日……………	144
16	坂中英徳著作集……………	151
17	坂中全集は人類の未来を照らす鏡……………	155

# 第一章

## 坂中論文の誕生



# 1 坂中論文の人類史的意義

処女作の『今後の出入国管理行政のあり方について』（一九七五年執筆）において「在日朝鮮人の処遇」など移民政策の基本方針を提案したことがきっかけとなつて移民政策の立案をライフワークとする道を選んだ。迷うことなく直観で決めた。それ以後、初心を貫き、日本の移民政策を牽引する論文を大量生産した。一〇〇〇本の論文は圧巻である。その結果、移民政策研究の第一人者と認められた。人口崩壊が迫る日本を革命的な移民政策で救う責任を一身に背負う立場になつた。近年は、世界の識者から「移民革命の先導者」「ミスターイミグレーション」の名で呼ばれている。

論文人生を回顧すると、好きなことを好きなように書くものと要約できる。七七の今も現役のバリバリである。一日の大半の時間を知的生産に使っている。年齢を重ねるとともに筆の勢いが増すという稀有の体験をした。ちなみに喜寿を迎えた二〇二二年に書いた『移民国家日本は世界の頂点をめざす』『核戦争時代の人道危機を救うのは私の使命』『世界に冠たる人道移民大国が出現した』『人道移民大国の道』の四冊はいずれも代表作に値する作品になつたと思う。

話は一九七五年に戻る。法務省入国管理局が、「今後の出入国管理行政のあり方につ

いて」という課題で、入管職員から論文を募集した。この論文募集で私の書いた論文が優秀作に選ばれた。論文の審査委員長を務めた竹村照雄氏（当時法務省入国管理局次長）の選評が私の手元にある。

〈第一部優秀作の坂中論文は、その視点において、その構想において、その論証において、まことに見事なものであり、『二十五周年記念』とするに全くふさわしい内容といふべきであった。審査員全員が一致してこれを優秀作に推したのである。出入国管理行政を世界史な変化発展の中で位置づけ、外国人の人権保障への明確な意識と国益との調和をめざして将来を展望し、しかもいたずらに理想に走ることなく、絶えず足下現実の問題に即し、これに立ち返りつつ議論を進める態度は、その考察の基礎となっている資料の豊富さとともに、力強く迫るものがあつた。〉

坂中論文は見識のある行政官に見いだされてうぶ声を上げた。しかし、その後は世間の猛烈な荒波にもまれる未来が待っていた。

一九七七年、竹村照雄氏のすすめで論文が公にされると、在日韓国・朝鮮人問題を考へる際の古典的論文と評価される一方で、二〇年近く研究者や活動家の間で賛否両論の

激論が闘わされた。

坂中論文で開陳した私の思想は、四七年後の今日も基本的に変わっていない。もっとも坂中論文を執筆するに当たって理想の移民国家をつくるという野心を抱いていたというわけではない。しかし結果論から言えば、坂中論文は一〇〇年後の日本と世界のあり方を視野に入れた移民国家理論であったことは紛れもない事実だ。この論文の持つ説得力と影響力は圧倒的だった。論文を発表した五年後の一九八二年には在日コリアンの法的地位の安定化や難民の地位に関する条約への加入など政策提言がことごとく実現した。誠に実りが豊かな論文人生であったと言わなければならない。

私に残された最後のミッションが世界の頂点を極める移民国家日本の樹立だ。ウクライナ難民を歓迎する国民が爆発的に増えるなど移民立国をめぐる情勢が急展開したことに鑑みると、これも大願のかなう日は近いと感じる。

歴史的大事業が大詰めの段階を迎え、坂中論文がたどった歴史を回顧する時間が多くなった。縁があつて移民政策論文一筋の人生行路を歩んだ。坂中論文を大黒柱とし、移民国家ニッポンの道を切り開いた。一般論を言えば、坂中論文は著者の死とともに激動の一生を終えることになる。いつぼうで移民政策論文中の白眉と評される坂中論文は著者の死後も語り継がれる可能性がある。あるいはこの論文は日本を人類共同体社会へ導

いた古典的文献として世界移民政策史に刻まれるかもしれない。

## 2 坂中論文の目次

移民政策学の泰斗の立場にある私は、坂中論文と共に移民国家日本の創建のために努力した時代を追憶する日を過ごしている。二〇二二年のいま日本の移民政策学の先鞭をつけた坂中論文は激動の生涯を終えようとしている。もしかすると幸運に恵まれた坂中論文は日本の移民政策を象徴する文献として著者の死後も存在感を持ち続け、二二世紀の移民全盛時代に再び脚光を浴びるかもしれない。

以下は、一九七五年に執筆した『今後の出入国管理行政のあり方について』の目次である。まるで神業のような壮大な理論を構築したものと、四七年後の著者は驚いている。

はじめに

### 一 出入国管理行政の意義

#### 1 外国人管理の歴史

- 2 現代世界における外国人管理行政の占める位置
  - 3 出入国管理行政の機能
- 二 今後の出入国管理行政のあり方
- 1 国際社会の動向
  - 2 国際政治の動向
  - 3 人権の動向
- (一) 外国人の人権保障の歴史と現状
  - (二) 外国人の政治活動の規制
  - (三) 人権関係諸条約と出入国管理行政
- (1) 国際人権規約
  - (2) 難民の地位に関する条約
  - (3) あらゆる形態の人種差別撤廃に関する国際条約
- 4 国際間の人口移動
- (一) 我が国の出入国管理の基本政策
  - (二) 開発途上国から先進国への人口移動
- (1) 外国人労働者問題

(2) 頭脳流出問題

(三) 不法な国際間の人口移動

5 在日朝鮮人の処遇

6 非常事態と外国人管理

7 出入国管理行政機能の拡大

おわりに

### 3 坂中論文と共に歩んだ五十年

一つの論文が一人の国家公務員の一生を決めた。一九七五年の坂中論文を移民政策理論の原点と位置づけ、移民国家理論の頂点を目指した。タブー視して誰も近づかない原野を開拓する道を歩んだ。

しかし渾身の力を込めて書いた一〇〇〇本の論文は知識人からも政治家からも一顧もされなかった。四七年間にわたり徹底的に無視された。千年来続く移民鎖国のイデオロギーを打破するため孤立無援の闘いが続いた。反坂中の空気が充満する中、移民政策論

文一路の泰斗はこつこつ論文を積み上げた。罵詈雑言が殺到する時代がエンドレスで続いたが、自分では天職に恵まれた充実の論文人生であったと思っている。

「移民一〇〇〇万人構想」と「人類共同体ビジョン」の旗の下に日本を理想の移民社会へ導くため一本一本の論文に魂魄を込めた。平易な文章を書くことを常に心がけた。世界に通用する明晰な論理展開につとめた。その結果、移民政策論文を駆使して世界的知的世界に打って出る地点に到達した。知友のテリー・E・マクドウガルスタンフオード大学名誉教授を筆頭に海外の知性が驚いた『Japan as an Immigration Nation』（移民国家日本）の上梓である。外国の知識人の眼には、前人未至の人類共同体哲学を打ち立てた坂中英徳は「日本人離れの日本人」と映るようだ。

二一世紀のいま現在には坂中英徳の移民革命思想に共鳴する日本人は皆無に等しい。むしろん政府の了解を得た国家ビジョンではない。そればかりか極右の知識人の一部から「危険な思想家」と恐れられている。しかし、一〇〇年後の移民総活躍時代には坂中ビジョンに共鳴する日本人が続出すると考えている。

二〇二二年現在。四七年前に書いた『今後の出入国管理行政のあり方について』（坂中論文）を読んだ人はほとんどいらないと思われる。もやは「伝説の論文」なのだろう。

若い先が少ない私は、坂中論文を書く機会に恵まれなかったとすれば私の人生はどう

なっていたのかを振り返る時間が多くなった。移民政策研究の先駆者の私はなかった。「ミスター入管」「反骨の官僚」「救世主」「革命家」「ミスターイミグレーション」など数々の形容詞をつけられることもなかった。世界の主要移民国家の間で反移民・人種差別を唱える勢力が勢いを増す中、前記英文図書で展開した人類共同体ビジョンを掲げて世界に打って出る雄姿もなかった。

老いの一徹の一言。七七年間の命をいただいたのに未だ悟りの境地に至らず、坂中論文の著者として最後の花を咲かせたいと意気盛んである。

#### 4 移民政策研究の夜明けを告げる論文

人口減少時代に対応する新しい国の形を描いた国際人口移動（移民）の発想はどこから生まれたのか？その答えは「坂中論文」にまでさかのぼる。坂中論文こそ日本の移民政策論の原点となった論文である。日本における移民政策研究の夜明けを告げる論文である。

一九七五年当時の私は、「移民」の入国を認めないとする入国管理の基本政策について、



日本の人口動向などを考慮して総合的に判断すると、今後も引き続きとるべき政策であると考えていた。その理由は以下のようなものであった。

「二国の人口変動は出生、死亡及び移住の三つの要因によって生じるが、現在すでに超高密度国である我が国の人口が近い将来にわたって出生が死亡を上回る自然増加の傾向にあることがはっきりしている以上、日本の入国管理政策はこれからますます深刻の度を加える人口問題をこれ以上悪化させないという基本方針に沿ったものでなければならぬ」

話は坂中論文から三〇年後の二〇〇五年に移る。同年の国勢調査の結果、日本の歴史的転換が誰の眼にも明らかになった。日本人口が減少局面に入ったのである。二〇〇五年を境に日本人口が増加から減少へ大転換することが明白になると、私は間髪入れず「移民鎖国」から「移民開国」へと政策を百八十度転換した。移民の入国を認めないとする政策の大前提がくつがえったからだ。

一九七五年の坂中論文の時代から人口動態と国際間の人口移動（移民）の関係に強い関心を持っていたから、日本が長期間の人口減少期に入るや否や移民政策のアイディア

が生まれるべくして生まれたのである。

以下は、坂中論文の「国際間の人口移動」の章の総論部分の要約である。三〇歳の時に書いた未熟な論文であるが、これこそ日本を移民国家へ導いた画期的な論文である。国際人口移動（移民）のアイディアを産み出すのに四苦八苦したことを覚えている。群を抜く想像力の持ち主であったと驚きを禁じ得ない。一九七五年の時点で日本が少子高齢化社会に入ること並びに日本が移民政策をとることの不可避性を認識している。

「今日、人類は多くの民族と国民に別れて世界各地に住んでいるが、これらの民族や国民はすべて、より適した生活条件の土地を目指して移住してきた移民と、その子孫によって形成されたものである。人類は今後も、生活の糧を得るため、あるいは快適な生活を求めて、国内のみならず国境を越えて活発に移動し続けることである。」

「国際間の人口移動（移民）については、地球上に人口分布と経済発展の不均衡が存在する限り、人口稠密で労働力過剰の国から人口希薄で労働力不足の国への人の移動は絶えないであろう。地球上に富の偏在が存在する限り、貧しい国から豊

かな国への人の移動は不可避であろう」

「世界の現状を観察すると、開発途上国における人口爆発と社会経済開発の停滞、先進国における人口革命と経済発展という顕著なコントラストが見られる。開発途上国においては、人口激増と貧困の悪循環が生じている。一方、先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている」

## 5 移民国家日本の発想の原点——坂中論文

人口減少時代の新しい国の形を描く移民国家日本の発想はどこから生まれたのか。その答えは一九七五年に書いた『今後の出入国管理行政のあり方について』（坂中論文）にさかのぼる。坂中論文が移民国家構想の原点となった論文である。

一九七五年当時の私は、移民の入国を認めないとする入国管理の基本政策について、

日本の人口動向などを考慮して総合的に判断すると、今後も引き続きとるべき政策であると考えていた。その主たる理由は「日本の入国管理政策はこれからますます深刻の度を加える人口問題をこれ以上悪化させてはならない」というものであった。

ところが坂中論文から三〇年後の二〇〇五年の国勢調査の結果、日本の歴史的転換が明らかになった。日本の経済と社会を支えてきた人口が減少局面に入ったのである。政府の将来人口推計は、五〇年後の人口は今の三分の二に落ち込み、一〇〇年後は四〇〇〇万人台の人口に激減することを示していた。

二〇〇五年を境に日本の人口構造が増加から減少へと転換する事実を重く受け止めた私は移民鎖国の考えをただちに改めた。移民の入国を認めないとする政策の前提がひっくり返ったからだ。そして移民政策の先駆者の立場に転換した。

私は、坂中論文の時代から人口動態と移民政策の関係に関する発想を温めていた。日本が人口減少時代に入ることが明らかになると移民国家日本のアイディアがすぐ頭に浮かんだ。『入管戦記』（講談社、二〇〇五年三月）の「二〇五〇年のユートピア」で提案した「移民五〇年間二〇〇〇万人構想」だ。

## 6 坂中論文の時代から人類共同体論の時代へ

移民政策のプロフェッショナルの人生を回顧すると、法務省入国管理局の地方局長時代の一九九七年から移民政策研究所所長の二〇二二年までの二五年間は、移民政策理論の完成に全精神を投入した。

主要著書が『入管戦記』（講談社、二〇〇五年）、『日本型移民国家の構想』（移民政策研究所、二〇〇九年）、『日本型移民国家への道』（東信堂、二〇一一年）、『人口崩壊と移民革命——坂中英徳の移民国家宣言』（日本加除出版、二〇一二年）、『日本型移民国家の創造』（東信堂、二〇一六年）、『坂中英徳 マイ・ストーリー』（移民政策研究所、二〇二〇年）、『移民国家日本は世界の頂点をめざす』（移民政策研究所、二〇二二年）などである。

なお、二〇二〇年に英文著作の金字塔『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』（LEXINGTON BOOKS）を発売した。

坂中英徳が主役を演じた移民政策理論の展開の歴史を要約すると、『今後の出入国管理行政のあり方について』（日本加除出版、一九八九年）を大黒柱とし、その後に執筆した論文集を支柱とし、これらの全体を体系的にまとめたものと言える。

処女作の『坂中論文』を移民政策理論の根本にすえ、それ以後に理論を發展させた移民政策論文集が骨となり肉となり血となり、ここに日本型移民国家制度の土台となる理論が完結した。

移民国家のあるべき姿を追い求める起承転結のなった論文人生であったといえる。質問としての移民政策学をきわめた。前記英文著作によつて世界の最高峰をゆく移民政策理論の完成をみた。

私の移民政策論は、気宇壮大な国家ビジョンであること、二二世紀の人類社会のあり方を視野に入れた未来構想であることから、貧困なる日本の知的世界は頭から無視する態度をとり続けた。結局、移民政策研究所の七人の理事と少数の友人以外に、坂中理論の真髄を理解する日本人は現れなかった。しかし海外の知的世界に目を転じると、活眼の持ち主が坂中理論の人類史的意義を認めた。坂中移民政策論の中心概念である人類共同体思想は、一〇〇年後の移民全盛時代を生きる地球市民が共感する普遍的理念として煌めいているにちがいない。

## 7 坂中英徳の単数意見から国民の多数意見へ

国家公務員を辞した二〇〇五年以後、著作・論文の形で発表した移民政策論は、国民の大多数から無視された。私の移民国家構想を評価する政治家も知識人もジャーナリストも皆無に等しい状況が続いている。坂中ビジョンの真価が国民に広く認められまでには一〇〇年単位の時間が必要なだろう。移民が躍動する二二世紀に生きる地球市民の評価に期待するしかないのだろう。

「人口秩序の崩壊はすなわち日本の崩壊」と喝破する私は、移民国家の理想像を求めて研鑽を積み、日本人の魂がこもった移民国家ビジョンを世に問うた。政策論文を書くことでしか社会に貢献できない日本人が、民間のシンクタンク・移民政策研究所を根城にして構想を練り、移民政策に関する数々の提言文を世に送り出した。

移民政策の口火を切った文章が、二〇〇七年二月の朝日新聞に発表した「移民五〇年間一〇〇〇人構想」である。だが当時の『朝日』によると、読者からの反対意見は皆無であったということである。実現の可能性のない空理空論と一蹴されたのだろう。

しかし日本史に輝く坂中提言は無傷のまままで生き残った。いま画期的な移民国家ビジョンが動き出した。インターネットの世界において若い世代の移民賛成の意見が爆発

的に増えている。『ワシントン・ポスト』『エコノミスト』など海外の有力メディアが日本政府に移民開国を迫った。

坂中英徳ひとりの見解にすぎなかった移民革命思想は、移民国家のあるべき姿を追い求めて研鑽を積んだ結果、世界の移民政策をリードする移民国家理論へと理論的進化を遂げた。二〇二二年現在の坂中ビジョンは、国の内外の支持の高まりを背景に政府が緊急に取り上げるべき国民的課題に発展した。政府も重い腰を上げ、外国人材の受け入れ範囲を大幅に拡大するとともに出入国在留管理庁を発足させるなど移民政策を推進するための体制整備につとめている。

## 8 筆一本で日本と世界の歴史を動かす

私はもともとアマチュアの物書きであったが、いつの間にか論文の執筆が本職になった。そして一九七七年から二〇二二年までに五七冊の本を出版した。

いずれも渾身の力をこめて書いた。練りに練った文章の作成につとめた。気宇雄大なタイトルを見て、国の重要政策に関わる論文の執筆に執念を燃やした日々のことが目に



浮かぶ。

ひとつひとつの論文の創作に全知全能を傾けた。これらの作品を完成させるのに生みの苦しみを味わった。政策も理論も自分の頭から絞り出したものばかりである。西洋人の借り物の思想は一つもない。内容的にも質的充実にとどめた。移民国家構想の根本理念の部分は変わらないが、人類共同体論や日本革命論などスケールの大きい論考が加わり、問題意識も世界の移民政策のあり方にまで広がり、思想も深化し、世界の知性が驚く斬新な理論へと発展した。日本史に刻まれる業績を残したことに鑑みると、私は移民政策論文を書く天賦の才に恵まれたのかもしれないと思う時がある。

なお、移民政策研究所から出版した三三冊余の私家本は、自身は大手の出版社から出たものにひけをとらない力作であるが、これを読む人は一〇〇人の知友に限られる。世間にその存在すら知られない無名の著作たちが世の中の一隅を照らすことができればそれだけで十分満足である。

これは私の希望的観測である。二一世紀の日本において論評の対象にすらならなかった坂中英徳著作集が二二世紀を生きる地球市民の必読書になっている。核戦争が切迫する時代の人類共同体哲学は「人類の未来を照らす鏡」という評価が定まっている。国境の壁が崩壊する一〇〇〇年後には人類の未知の領域を開いた坂中英徳は「人類の希望の

「星」という尊称で呼ばれている。



## 第二章

### 日本の歴史が動く

# 1 日本型移民政策の骨子案

移民政策一路の行政経験を活かし、移民法の制定、移民協定の締結、移民庁の創設、移民政策基本会議の設置、技能実習制度の廃止など移民法制のあり方を含む、直ちに移民国家への移行可能の移民国家基本計画案を提案している。人口秩序の全面崩壊という国家非常事態に対処するための実践的で即効性に優れた移民政策である。しかし、五〇冊余の著作の形で発表した日本型移民政策の提言は、二〇〇五年から二〇二二年まで、移民政策の専門家が不在の知的世界において議論の対象にすらならない。むしろ政治の争点にのぼることもない。自分の非力に切歯扼腕する日々が続いている。

ところが、ひとり「移民」、「移民」と言い続けていたら奇跡が起きた。人口がピークを迎えた二〇〇五年の国民のほぼ全員が移民政策に無関心の時代から、人口減の影響が社会の各般に深刻な影を落とすようになった近年の移民受け入れ賛成が五一%（二〇一五年四月の朝日新聞の世論調査）へと、国民の過半数が移民政策を支持する新局面に入った。

目標達成の近くまできたと思うが、この程度の移民賛成の世論で満足してはならぬと強く戒めている。移民政策から距離を置く立場を決め込む政治の厚い壁を打ち破るため

にもさらに上の世論形成を目ざす。ただし乗り越えるべきハードルは高いと感じる。国民の間に移民との共生関係を結ぶことに積極的な姿勢がほとんど見られないのだ。どうすればこの強固なる世論の壁を突き破り、政府が移民開国を決断せざるを得ないところまで移民賛成の世論を固めることができるか。

ひとえに移民政策のオピニオンリーダーを務める私の責任である。移民の受け入れの必要性和緊急性について多数の国民の理解を得るため説明責任を尽くす。日本の移民開国の世界的意義、世界で高まる日本の移民開国への期待、世界の先頭を行く移民法制的具体的内容、移民政策と社会保障制度の関係、移民政策をとらない場合の財政破綻などについて具体的に説明する。創作意欲が旺盛なのが救いである。これからも力のこもった論文を発表し、移民賛成の世論を盛り上げたいと思う。

私は、国民の七〇%が移民受け入れ賛成の世論を形成し、移民政策を支持する国民の多数意見で政治を動かすという野心を抱いている。事柄の性格上、移民立国をめぐる議論は民族感情がからみ、国論を二分するような激論や血が流れる抗争に発展することも少なくない。しかし、排他的な民族感情が欧米諸国の国民と比較して希薄な日本においては、たとえば白人至上主義の考えが根強く残る米国やイスラム恐怖症の広がりが見られるフランスのように、移民政策で国民の分断を招くことにはならないと考えている。

欧米の移民大国が移民の門戸を開かず方向に向かう中、ひとり日本が民主主義的手続きに基づき円満に移民国家へ移行すれば、多数の国民の支持を背景に移民国家を樹立した民主主義革命の代表例として世界のモデルケースになるだろう。

## 2 多様性の豊かな社会を創ろう

多様性に富む日本を創るため何をなすべきか。日本の伝統文化の精髓を教える文化教育と多民族共生教育とを一体不可分なものとして実施することが重要であると私は考えている。文化的なアイデンティティを失った根無し草のようなコミュニティではなく、日本人の心と移民の心が通う共生社会をつくるには「日本人の心」と「地球市民の心」を併せ持つ市民の育成が肝要である。そうした心の広い日本人が多数派を形成する社会、それこそ私が考える理想の移民社会である。

ただでさえ均質性の高い民族であるのに、それに輪をかける画一化教育で育った政治家、官僚を筆頭に、大勢順応型の日本人や、井の中の蛙のような心の狭い日本人が多くなったように感じる。

「移民開国」を地球市民への飛躍の第一歩とし、世界各国からその道の第一人者が集まる社会、異なる文化を貪欲に取り入れる社会、異色の人材が躍動する社会、多様な民族文化が栄える社会、多言語を駆使する人材が続出する社会に生まれ変わる必要がある。学問・芸術はもとより芸能、スポーツ、料理、教育、都市の魅力、外国人観光客の誘致、組織運営・企業経営の刷新、政治・行政の革新などの面で、国民を構成する民族の多様性はプラスに働くと考えている。私たち日本人は多様性の豊かな社会の持つ強みを深く認識する必要がある。

移民政策を導入し多様な民族を迎え入れた日本社会は、面白い、活力に富む、強靱な社会に生まれ変わる。人口減による閉塞感にさいなまれている日本の若い世代に、多様に富む移民社会は生きる夢と希望を与える。

この場を借りて付言しておく。一〇〇年のスパンで人口動向を見ると、若年人口の激減と高齢人口の激増が重なる人口秩序の崩壊が避けられないから、たとえば現場を担う若手職員の確保が困難になった自衛隊、警察、消防、入管を筆頭に、国家の基本制度の存続が危うくなるのは確実である。これからの人口激減が政治・経済・社会・国民生活・防災体制などに及ぼす影響は想像を絶するものがある。最大規模での移民政策の導入は不可欠だが、日本の延命策としてはそれだけでは十分とは言えない。明治以降



続いてきた人口増時代に形成された人生観・生活様式から政治制度・産業制度・地方制度・教育制度・司法制度・医療制度などの各制度を根本的に見直す必要がある。これは日本の歴史はじまって以来の日本革命に発展する。

### 3 日本型移民政策大綱

日本の移民受け入れ制度の大枠を定める基本法として「移民法」を制定する必要がある。日本の移民政策の基本理念として、公平・公正の立場から世界の多様な国籍の人々を幅広く受け入れ、世界各国との友好親善関係を深めるとともに、世界平和に貢献することを規定する。とくに、国籍・民族・人種・宗教の異なる人々が日本で平和的に共存共栄する「人類共同体社会」の実現を国家目標とする旨を移民法の条文でうたいあげれば、世界各国の模範となる歴史的な「人類共同体宣言」に発展するであろう。

移民受け入れ基本計画の策定については、まず、内閣総理大臣を議長とする移民基本政策会議を内閣に置き、年間の移民受入数、移民の入国を認める産業分野並びに地方自治体、年間の国籍別移民受け入れ枠の決定などの基本方針について審議すること。つぎ

に、内閣に移民政策担当の閣僚を置き、移民基本政策会議の事務局として「移民庁」を設置する。移民庁は内閣総理大臣の移民受け入れ計画の企画・立案を補佐する。そして、関係府省は、国会で承認された移民受け入れ計画に基づいて移民政策を実施する。国会の承認を求めるのは、政治家、国民の合意の上で移民政策を公明正大に進めるためである。

移民法において世界各国からバランスよく公平に受け入れることを移民政策の基本にすえ、国別の量的規制を行なう根拠規定を設ける。とりわけ多数の友好国との間で「移民協定」を締結することが重要である。

政府は、移民法の規定に基づき、人材需給の逼迫状況や受け入れ体制の整備状況、移民の社会適応の進捗状況、移民協定の履行状況に加え、日本を取り巻く国際環境や移民政策に寄せられる国民の意見などを総合的に勘案して、年次計画を立てて移民政策を円滑に進める。その場合、地方の人材需給の実情に詳しい都道府県知事の意見を尊重する。また、国籍法を改正し、先進国の例にならない、二重国籍を認めること、並びに移民二世・三世に最も安定した法的地位（国民）で生活してもらうため、永住者の子として日本で生まれた外国人が出生の時に日本国籍を取得できる手続きを定めることを真剣に検討する。

ちなみに日本と同じ血統主義の国のフランスは、移民の子として出生した人、すなわち移民二世に対してフランス国籍を認めている。ドイツも血統主義の例外として移民の子（移民の三世代目）にドイツ国籍を与えている。

#### 4 外国人労働者と奴隷労働者とは同根

なぜ「外国人労働者」ではなく「移民」が必要なのかと聞かれることがある。私の考えはいつも同じだ。「人口が激減してゆく日本が受け入れる外国人は移民」というものだ。国民の数が激減する日本においては、国民の増加に直結する移民政策以外の選択肢はない。移民は、国民と同じ生活者、勤労者、納税者である。移民は社会の一員として、地域経済、社会保障制度、地域社会の安寧秩序を支えてくれる存在である。

入国時の移民の多くは留学生を予定している。移民どうしの結婚はもとより日本人との結婚も多数にのぼると思われる。日本人と移民の国際結婚が増えれば二世が生まれ、出生率の向上が期待できる。

外国人労働者の受け入れには反対である。外国人労働者の本質は労働力である。日本

人と共生する存在でも将来の国民でもない。およそ人口崩壊の危機に直面する国の求める人材ではない。

国民の数が加速度的に減ってゆく日本が最も必要とする外国人は、日本に永住する外国人すなわち「移民」である。「永住者」という在日外国人としての最高の地位を得た移民は子々孫々日本に住む決意で仕事に励む。地域社会の一員として日本人との良好な関係を結ぶことにとめる。日本語を熱心に勉強し、日本社会に速やかに溶け込む。時間の経過とともに移民は日本社会も日本文化も好きになり、国籍も取得して日本国民になる。

欧米諸国の外国人の受け入れの歴史を見ると、最初は奴隷労働者として、その後は外国人労働者として入れてきた。現在は、移民政策が正しい外国人受け入れ方法とされている。

移民の地位で外国人を迎えることによって初めて、移民の子供の教育、国民との共生、社会統合、家族の結合、社会保障制度の適用が視野に入ってくるのである。

## 5 移民の定義について

わたしは「移民」という言葉を、世界の常識に従い、「入管法に定める永住許可を受けた外国人」の意味で用いる。米国移民法における「グリーンカード取得者」と同じ意味である。

なお、「移民」（永住者）の概念と「国民」（国籍・市民権）の概念は密接に関係するが、法律上は別物である。

欧米諸国の外国人の受け入れの歴史を見ると、最初は奴隷として、その後は労働力として外国人を入れてきた。現代の世界では、移民（永住者）として、同じ人間として、社会の一員として外国人を迎えるのが主流である。移民政策が人道にかなう最善の外国人受け入れ方法とされている。

たとえば、第二次世界大戦後一貫して外国人を労働力として入れてきたドイツは、二〇〇五年に移民国家宣言を行なった。以後、外国人に対するドイツ語教育に力を入れ、外国人を永住者の地位で入れる移民政策を積極的に展開してゆく。今ではヨーロッパ第一の移民大国の定評がある。

外国人労働者は、産業界が外国人を労働力として、必要なときに必要がなくな

れば追い返すものである。多くの場合、人間として遇されることはなく、低賃金の労働力としてこき使われる。実際上は「奴隸」とあまり変わらない実態も見られる。

移民は日本に永住する外国人である。将来国籍を取得する可能性の高い外国人である。移民は社会の一員として納税義務をはたし、社会保障制度に加入する。憲法上国民固有の権利とされる選挙権・被選挙権・国家公務員就任権以外の権利を有する。移民は、社会に溶け込み、地域の経済と安寧秩序を支えてくれる。

国民の減少が続く日本の外国人政策は、国民の増加につながる移民政策以外の選択肢はあり得ない。将来の国民として、生活者として、働き手として、移民とその家族の国を認めるのが、人口減少社会の正しい外国人の受け入れのあり方である。

今日、政治家、官僚、学者、研究者、ジャーナリストの間で「移民」という言葉が市民権を得た。近年、「移民」「移民政策」と銘打った論文、著作が数多く見られるようになった。たとえば明治三十一年創刊の『三田評論』（二〇一九年七月号）は『移民社会』をどう捉えるかの特集記事を組んだ。驚きを禁じ得ない。ここ最近のメディアやネットの世界において「外国人労働者」に代わって「移民」が主役に躍り出たと感じる。

「移民」の受け入れに消極的な政府も、公文書で「移民政策はとらない」と強調し、「移民政策」の広報に一役買っている。そして、二〇一八年一〇月、国会の本会議で移民政

策をめぐって議論の幕が切って落とされた。

私は「一般社団法人移民政策研究所所長」の肩書きで、「移民」「移民政策」「移民革命」「移民国家」「日本型移民政策」「移民一〇〇〇万人構想」「人口崩壊と移民革命」「移民国家の世界的展開」「日本の移民国家ビジョン」などの用語を駆使して論文・著書を発表してきた。二〇一三年の春からは連日、ネット世界でこれらの言葉を使って日本型移民国家ビジョンを積極的に論じている。内外のメディアの取材に対しても同じ姿勢を貫いている。

なお、私は「奴隷労働者」と近縁関係にある「外国人労働者」という言葉を専ら使う日本メディアの取材をすべて断っている。「外国人労働者」という言葉の使用にこだわる日本の主要メディアに私が登場することはない。「移民政策」という言葉のみ使う外国メディアに移民政策研究所所長が頻繁に顔を出すことになった。

付言すると、欧米の知的世界においては「奴隷労働者」と同義の関係にある「外国人労働者」という言葉は禁句になっている。

## 6 日本版奴隷制度の即時廃止を求める

移民の地位で外国人を迎えることによつて初めて、外国人教育、外国人との共生、家族の結合、社会保障制度の外国人への適用が視野に入る。

移民は滞在期間が無期限で、国民になる可能性の高い外国人である。国民と移民の社会統合が国民的課題になる。それゆえに移民先進国において移民政策が最善の外国人受け入れ法とされている。

国民の数が激減する日本においては、国民の増加に結びつく移民政策以外の選択肢は考えられない。将来の国民として、生活者として、働き手として、むろん人間として、移民とその家族の入国を認めるのが正しい外国人の受け入れである。

私は法務省入国管理局勤務時代から「研修という名の労働」は絶対認めるべきではないと一貫して主張してきた。非人道的で中間搾取のかたまりとも言うべき技能実習制度は一刻も早く廃止すべきだ。「勉強活動」と「就労活動」とを峻別して規制する入管法の精神に反するからだ。今もその考えに変わりはない。いくら法律を改正して受け入れ機関への管理を強化しても、もともとが「木に竹を接ぐ」いびつな制度であるから不法就労の隠れみこのという制度の本質は変わらない。どうやっても不法残留者などの入管法



違反事件と、賃金未払いなどの労働基準法違反の事件が続出するのは避けられない。

技能実習制度はすでに国際的な批判を浴びており、アメリカ政府からは「強制労働に近い状態」、国連からも「奴隷・人身売買の状態になっている」などの厳しい批判を受けている。深刻化する人手不足を補う一時しのぎの措置ということだとしても、払う代償は余りにも大きい。日本の外国人処遇の歴史に汚点を残したと私は考えている。

日本版奴隷制度を温存すれば、本来あるべき移民政策を毀損することとなり、超少子化時代の日本の命取りになる。諸悪の根源の技能実習制度の全廃なくして日本経済の健全な発展はないと断言してはばからない。

## 7 国の将来を憂える憂国の徒

私が提唱する移民国家ビジョンに関し、次のような感想が寄せられている。「千年来の移民鎖国からの歴史的転換」(日本文明史家)。「憲法改正以上の難事業」(都議会議員)。「壮大なユートピア計画」(全国紙の記者)。「世界の救世主」(在日パキスタン人)。「人類共同体思想は人類史を画する提言」(在日韓国人)。

内外の知識人から望外の評価をいただいた以上、評価に値する業績を後世に残す責任があると心に決めている。だが大風呂敷をを広げたのでその全部を実現するのは不可能と早々に白旗を上げている。人類共同体社会の実現など人類未到の壮挙の達成は二二世紀の地球市民に引き継ぐことを許していただきたい。

日本の歴史をひもとくと、私たちは改革を重ねて生き延びるのは得意だが、根本的な変革を好まないところがあると認識している。私たちは「明治維新」と呼称し、「明治革命」とは言わない。大日本帝国憲法の「改正」にこだわる。

日本人は国の断絶を嫌い、国の連続性を尊ぶ民族なのだろう。私は「緊急時に和の心で国民が一つにまとまる」国柄を誇りに思うことでは誰にも負けない。私たちは本物の革命を一度もやらなかったかもしれないが、先人の叡智と努力のおかげで日本文明は地球文明のなかで確固たる地位を占めている。

過去のこととはさておき、今日の日本は人口ピラミッドの崩壊という史上最大の危機に直面している。二〇〇五年三月に国家公務員生活を終えるにあたって私は、世界の模範となる移民政策を打ち立てるといふ恐れ多い国家目標を立てた。その旨を『入管戦記』（講談社、二〇〇五年三月刊）の中で宣言した。「移民五〇年間二〇〇〇万人構想」である。

移民政策研究所所長時代の私は、執筆活動を通して日本を移民国家へ導くオピニオン

リーダーの大役をつとめている。一握りの反移民分子からは売国奴呼ばわりされたが、世界の知識人の中には「日本の救世主」「ミスターイミグレーション」と評価するむきもある。極右からは移民革命の先頭に立つ反日思想の持ち主と罵倒されているが、自分では憂国の情の熱い愛国者と思っている。私の移民政策論文の根底には、日本人特有のやさしい心と燃えるようなサムライスピリッツが仲良く共存しているのではないか。私は国の将来への思いと世界市民の幸せを心に刻んで筆を執っている。

## 8 人口崩壊は移民国家を創建する千載一隅の機会

私は日本史上はじめての人口秩序の崩壊を日本が移民国家へ転換する好機と認識する。私たちは移民の力を借りて日本の一大危機を乗り切るとともに、日本民族その他すべての民族がうちとけて一つになる「多民族の融和」をめざす。日本列島を人類共同体社会に一新し、世界の青少年が日本移住を夢見る移民社会の理想郷を打ち立てる。

そのとき先祖代々の日本人に求められるのは、日本人としての民族的アイデンティティを持ち、かつ異なる民族を対等の存在と認めることだ。日本人の根本精神を堅持す

るとともに少数民族の固有文化を尊重する。究極の目標は民族の心と寛容の心を兼ね備えた地球市民の誕生だ。

世界の諸民族が日本に永住したいと憧れる国は、日本人が日本人としての誇りを持ち、移民が移民としての誇りを持つ社会だ。日本人と移民の双方が互いの生き方を尊重し、共に生きる社会が、私が描く移民国家日本像だ。

ここで二〇二二年現在の心境を述べる。国家公務員を辞した二〇〇五年に移民立国の問題に着手した時点において移民鎖国を支える日本人の精神基盤がこれほどまで強固なものであるとは予想もしなかった。これを覆すのに一七年の歳月を要するとは思いませんでした。もっと早く移民開国を実現できると思っていた。まったくもって私の不明の致すところである。

もっとも見通しの甘さが思わぬ好結果につながることもある。悲願の達成に向けてこの努力を積み重ねた結果、人類共同体哲学を全展開した移民政策理論の最高峰『Japan as an Immigration Nation』(LEXINGTON BOOKS、二〇二〇年二月)を出版することができた。この本を書き上げて論文人生の画竜点睛が成ったとの思いがこみ上げてきた。

## 9 日本は移民の新天地として生まれ変わる

人口激減と新型コロナの直撃が重なって再起不能の事態に陥った日本が世界に緊急にアピールすべき国家政策は何か。人口秩序の崩壊危機が深まるいつぼうの日本を再生させる政策を一つ挙げると問われれば、私は直ちに移民開国と答える。

東京を筆頭に全国のいたるところで少子高齢化が進む日本は、世界人材を獲得するまたとない機会とめぐり合った。瀕死状態の日本は「九死に一生」を得たと言うべきである。コロナウイルスに襲われた世界の主要移民国家が一斉に移民の入国の扉を閉じたからだ。

日本政府が「コロナウイルス問題が終息すれば移民開国を断行する」と世界に向けて表明すれば世界の若者に生きる勇気をもたらす。世界各国から有為の人材が日本に殺到する。「災い転じて福をなす」の言葉通りの展開が見られる。コロナ後の日本は世界の先頭を切って活力を取り戻す。

米国、英国、フランス、ドイツなどの移民国家が移民の入国規制を強める中、世界の人々は新進気鋭の移民大国の誕生を歓迎する。「移民に冷たい国」から「移民に温かい国」へと日本のイメージは一新される。世界人材が日本永住を憧れる「移民の新天地」とし

て日本は生まれ変わる。

移民国家ジャパンの華麗な姿を披露すれば、世界の若人が喜びの声をあげる。国の内外の若い世代の祝福を受けて帆を揚げる移民国家の未来は希望に輝くものになる。

日本史上最大規模の人材開国を成功に導くため、私たちは心を一つにして責任をはたす必要がある。国は移民受け入れ体制を整備する。国民は日本人ならではのもてなしの心で移民を歓迎する。移民政策のオピニオンリーダーを務める私は世界最高水準の移民受け入れ制度を確立するため理論構築につとめる。

## 10 若者たちの決起を期待する

最近の私は、移民革命の先導者の天職を与えられ、新しい国を創造する天命を授かった幸運に感謝する日日である。同時に責任の重さがひたひたと胸に迫る。なかでも移民国家日本を担う人材の育成について頭を悩ませている。

いよいよ日本の運命の決まる日が近いと予感する。人口秩序の崩壊危機が迫る日本の窮地を救う移民国家日本への設計図を描いた。移民政策を支持する若者が急増中である。

最後に残された私の仕事は、移民賛成の世論の力を借りて移民立国の決断を政府に迫ることだ。

この大詰めの仕事は多数の国民の協力を得て成し遂げたいと思う。移民革命のオピニオンリーダーを務める私の責任で国民の大多数が移民を歓迎する世論を形成し、国民の多数意見に基づき移民開国を政府に迫る形で——つまり国民主導で移民国家ニッポンを創建したいと考えている。

さて、移民国家日本の建設のような千年に一度の世直しは、幕末の吉田松陰や坂本龍馬らの綺羅星のような若者が決起しないと成功しない。今こそ明治維新の時の志士たちのように、二〇代の国士たちが日本の革命を行なうために立ち上がる時だ。新しい歴史を創るのは決まってる新進気鋭の若い人たちだ。

斬新な発想と行動力のある若き精鋭たちが移民国家をつくる舞台で主役を演じ、移民政策に詳しい私が後方で支えるのが正しい革命のやり方である。

私は五〇冊を超える移民政策論文集を世に送り出した。国の存続を思う心のこもった移民政策論文を精読し、私の考えに共鳴する若者たちが輩出するに違いない。その中から移民革命とそれに続く日本革命を牽引する国民的リーダーが出現するであろう。

## 11 政治家の立場と革命家の立場

政治家の立場と革命家の立場が相いれないことは、古今東西を問わず、一般的に認められることではないか。それでは、日本の移民革命を提唱する坂中英徳と、日本の国政にあずかる政治家とは、いったいどのような関係にあるのだろうか。

二〇一四年末、畏友の英国人ジャーナリストから「革命的な移民国家ビジョンを提言している坂中さんに官邸から圧力がかからないのですか」と聞かれた。私は「四面楚歌の状況下にあることに変わりはないが、官邸から坂中構想に対する批判も圧力も一切ない」と答えた。

事実、内閣総理大臣官邸は、急進的な移民政策を唱える革命家を敬して遠ざけるといふか、政治家のやるべき仕事を民間人にやらせて世論の動向を探るといふか、国家公務員時代の実績に配慮したというか、その真意のほどは知らないが、政治の本丸に進出した坂中英徳を自由放任でほうっておいた。私は移民政策から距離を置く政治の虚に乗じ、心のおもむくままに革命的な移民国家論を展開中である。

移民政策の世界は私の独壇場に終始し、移民国家のあるべき姿を自由自在に描いた。この八年間、私は毎年のように移民国家理論の新知見を盛り込んだ書物をあらわした。



そして新刊を出すたびに政府首脳に献本した。私の移民国家理論は年を追って理論体系が整い、説得力も増す中、内閣官房は坂中移民政策論の発展と国民世論の動向を注意深く見守っていたにちがいないと思っている。それを裏付けるものがある。

二〇一五年六月、政府中枢から招かれ、政治家を含む内閣官房の主要幹部を相手に「日本型移民国家への道」のタイトルで講演した。二〇名のエリート官僚たちが私の話に聞き入った。日本型移民国家構想に対して「グッドアイデア」という答えが返ってきた。講演が終わったときに若手官僚の間から拍手が起きた。帰り際に私は「君たちが新しい日本をつくるのだ」と言葉をかけた。

政府高官に移民政策を語ることの重要性に鑑み、練り上げたスピーチ原稿を用意し、講演に臨んだ。席上配布された「日本型移民国家への道」と題する一文は、政界、官界に多大の影響が及んだと聞いている。

ちなみに、私を講演に呼んでくれた政治家から質問タイムの冒頭、「坂中さんの移民政策について国民はどう見ていますか」と聞かれた。私は「本年四月の朝日新聞の世論調査で移民賛成派が移民反対派を大幅に上回ったこと、移民政策研究所のホームページの「坂中提言」へのアクセス数が急増していることなど最近の状況から判断すると、若い世代を中心に移民受け入れに賛成の国民が増加傾向にあると認識している」と答えた。

そのとき革命家と官邸とはいわば阿吽の呼吸で結ばれていると思った。革命家と政治家とでは、移民政策をとるか否かでは見解を異にするが、国を開いて人口危機の日本を救うという国家目標と、五〇年後の日本人口の目標を一億人とする点では一致する。

そのような見方が正しいとすれば、政府首脳の黙認の下で大きな夢を追いかけ、日本の永遠の存続を期して移民国家構想を立てた坂中英徳は、国家制度の打倒を唱える「典型的な革命家」ではなく、国家制度の維持を唱える「異色の革命家」ということになる。二〇一八年七月、長年の苦勞が報われるビッグニュースに接した。内閣官房が、私の古巣の法務省入国管理局を法務省の外局の「出入国在留管理庁」に昇格させることを決定した。これは将来の「移民省」構想への布石と私は理解した。政府首脳は坂中移民革命論を事実上受け入れたと理解してもいいのかもしれない。いずれにせよ政府が移民立国に向かって大きな第一歩を踏み出したことは確かである。

以下は革命家の独り言である。解散権は内閣総理大臣の専権事項であるから聞き流してもらって結構である。ただし、令和の日本人の歴史的証言としてこれだけは言っておかないと、長年にわたり移民立国の是非に関する国民的議論の必要性を訴えてきた私の腹の虫がおさまらない。

〔明治の革命に匹敵する歴史的転換を行なう以上、その前に内閣総理大臣が革命的な移民政策をとることの是非について国民の信を問うのが筋だ。それをしないでなくずしに移民国家に移行した場合には日本の未来に禍根を残す。手順を踏んで大多数の国民の賛同を得て誕生する移民国家日本は健やかに成長するだろう。〕

## 12 坂中ビジョンが世界を席卷する日

伝説の論文『今後の出入国管理行政のあり方について』（一九七七年）から畢生の大作『移民国家日本は世界の頂点をめざす』（二〇二二年）までの四五年間に発表した著作は極左と極右の双方から身の危険を感じるような攻撃にさらされた。のみならず劣化の著しい日本の知的世界はその存在自体を無視する態度をとり続けた。むろん論評の対象になることはなかった。前途が真つ暗の絶望感にさいなまれる時代が続いた。

しかし一〇年ほど前に国内の評価など気にならなくなった。日本の知識人とは棲む世界が違ふと割り切った。そして以前にも増して未来志向の論文を精力的に書いた。最近の私は一〇〇年後の世界の人びとの評価が肝心という心境になった。

学生時代から平凡な人間として生涯を終えるのが定めと思っていたが、「坂中論文」「ミスター入管」「反骨の官僚」「反日」「売国奴」などのレットテルを貼られて平穏な生き方は早々に断たれた。注目される存在になった以後は緊張感のゆるむことのない人生を過ごした。

そして移民政策研究の第一人者の重責を果たした。独創的な論文で始まり独創的な論文で終わる人生を全うした。日本と世界の若者をひきつける論文を数多く書いた。それが功を奏して坂中英徳の移民政策理論の金字塔といふべき人類共同体哲学を世界の代表的知性が高く評価した。私が真骨頂を発揮した五五冊余の著作集は「人類の宝」として永遠の輝きを放っているかもしれない。

創作活動が最盛期を迎えた二〇二二年の私は、人類共同体社会の創造という人類の夢が詰まった目標に向かって筆の歩みを早めている。移民国家日本を創建する仕事が人類史の頂点を極める大業に発展するとは夢にも思っていなかった。人類の夢の実現への端緒を開いた著作が、『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』(LEXINGTON BOOKS、二〇二〇年)、『人類共同体宣言が世界の人道危機を救う』(移民政策研究所、二〇二〇年)並びに『移民国家日本が世界を変える』(移民政策研究所、二〇二〇年)の三部作である。

人類共同体哲学に共鳴する世界の知性は「国の安寧秩序と世界平和への熱い思いが詰

まった坂中英徳移民政策論は万人の胸に響く。人類史的意義のある仕事をしたと評価される時代が必ずや来る」とエールを送ってくれる。

### 13 明治の革命を凌駕する令和の革命を

人口の将来推計上、仮に日本が五〇年間で一〇〇〇万人の移民を入れても、三〇〇〇万人の人口は確実に減る。人がいなくなった地方自治体の消滅や、人材獲得が困難になった中小・零細企業の倒産が相次ぐ。トヨタ自動車などの世界企業も専門職や技術職を十分確保できなくなり、国際競争力が一段と低下する。自衛隊・警察・消防も要員の獲得が難しくなって国の安全保障体制・防災体制の一角が危機に瀕する。

要するに、第二次世界大戦後の七七年間の長きにわたり根本的な制度改革を怠った日本の政治・社会・経済・財政など国の基本制度が崩壊危機に襲われる可能性が高いということである。明治の革命以上の国家制度の根本的改革が必要不可欠だと考える。

私たちは日本という国を存続させるため具体的に何をなすべきか。第一に移民の入国の扉を開くことだ。世界の人材を日本社会の中に取り込むのだ。国民が一丸となって世

界の鏡となる移民社会をつくるのだ。それに加えて有史以来の日本大革命も必要だ。移民革命と日本革命の二つの革命を同時に断行する以外に日本国の生き残る道はないと断言する。

移民政策のオピニオンリーダーを務める私は移民開国の機が十分すぎるほど熟したと認識する。政治家は移民開国を求める国民の声に耳を傾けるべきだ。政府は「移民政策はとらない」という時代遅れの方針を直ちに撤回すべきだ。国民は移民を温かく迎える覚悟を決めるべきだ。

岸田文雄首相の歴史的決断をお願いする。「今後五〇年間で一〇〇〇万人の移民（難民を含む）を受け入れる」と世界の人々に約束してもらいたい。コロナウイルスの直撃を受け、移民・難民に冷たい風が吹きすさぶ中、国際社会は「人種や宗教の違い乗り越えて人類が一つになる人類共同体社会の理念」を掲げて立ち上がる人道移民大国の出現に歓呼の声を挙げるに違いない。

## 14 定住支援体制の整備が緊急の課題

二〇二二年六月現在の在日外国人の現実を見ると、日本社会に適応できないで困っている外国人の姿が目立つ。どうしてこういう状況になったのか。その主因として、外国人の入国を認めた後の、日本語教育、就職支援などの定住支援がほとんど行なわれていないことが挙げられる。日本の移民政策において最も立ち遅れているのは、在日外国人の日本社会への適応を助けること、つまり「社会統合政策」だ。

在日外国人問題を解決するとともに、人口減少社会に十分対応できる移民受け入れ制度を整備するためにも、移民の日本社会への融和を進める施策を早急に打ち出す必要がある。問題を放置すれば、日本人の「外国人」観は悪くなる一方だ。そうなれば、移民の受け入れで人口減少問題に対処しようとする道を閉ざすことにもなりかねない。

日本が多様な民族から構成される「移民社会」になっても、国の基本的な枠組みは、日本語に代表される日本文化と、日本の社会・経済・法律制度が中心であることに変わりはない。目指すべきは、日本国の基本秩序の下で、「移民にとって日本に来てよかった。国民にとって移民に来てもらってよかった」と思えるような社会をつくることである。そのような移民社会を造るのが社会統合政策の核心であると考えている。

その目的を達成するために私たち日本人は何をなすべきか。第一に、日本に入国した移民に日本語や社会の基本ルールを教える移民教育制度を整備すること。第二に、国籍や民族を問わず、すべての人に機会均等を保障する「移民が生きがいを感じる社会」をつくること。

社会統合政策の中核となるのは、ニューカマーの移民に対する日本語学習支援である。とくに大事なのは、日本生まれの移民二世向けの日本語教育プログラムの充実を図ることだ。移民二世が日本語を完全にマスターすれば、日本語には日本人の価値観も日本文化も日本の風俗習慣もすべて含まれているから、移民の日本社会への適応が順調に進む。行政官として在日コリアンをはじめ様々の国籍の永住外国人と接してきた経験から、日本社会の持つ同化力は非常に強いものがあると感じている。私はかつて在日朝鮮人問題で「同化」と発言して叩かれたが、私の言う同化は強制するものではない。移民が進んで日本国民になりたいと自然と思うようになる「自発的同化」である。

私が親しく接した在日外国人たちは、変化に富んだ自然環境と穏やかな社会風土、秩序がよく保たれた日本社会を気に入っている。日本料理も日本文化も魅力的だと言う。移民の二世以降の世代が日本の学校で勉強し、日本語を自由自在に使えるようになり、移民に対する偏見も差別もない社会で成長してゆけば、日本が好きになり、日本人の友



達もでき、日本社会に自発的に溶け込むと考えている。

## 15 世界の知識人と日本の知識人

世界の知識人の評価と日本の知識人の評価の隔たりが大きい。日本の移民政策のことである。私が提唱する移民国家ビジョンに対する世界の知識人の評価は高い。他方、日本の知的世界においては論評の対象にもならない。地球的な視野から国の政策の歴史的転換を迫る坂中移民政策論は、小さなテーマに関する研究が得意の日本の大学教授らにとってどのように論評すればいいのか皆目見当がつかない難物なのだろう。

坂中論文を書いた四七年前にすでに私は、日本の知識人が時代を見る目も人を見る目もないと見抜いていた。

一九七五年に書いた在日朝鮮人政策論が、根拠のない理由に基づき、当時の進歩的文人や大学教授から袋叩きの目に遭った。その時から今日まで一貫して日本の知識人に対する不信感を持ち続けている。それどころか最近では、移民政策に関して政治家の顔色ばかりうかがう大学教授、文人、ジャーナリストを軽蔑している。

私の移民政策論は日本の知識人から無視される状況が久しく続いているが、二〇一八年一〇月政府が移民立国に向けて重い腰を上げたこと、二〇二〇年二月私の英語版論文集が米国で出版されたことから、近く海外の評価と国内の評価の差が解消されると考えている。移民政策は世界の評価に日本の評価が追随する形でおさまるだろう。

そして節操のない大学教授たちの移民・難民の受け入れ賛成の大合唱が始まる。彼らは昔から移民政策に賛成であったなどと弁解につとめる。私は主義・主張をころころ変える光景を見たくないが、日本の近現代史においてよく見られる知識人の思想転向である。

## 16 私は「多文化共生」という言葉を使わない

外国人の受け入れのあり方を論じる場合、観念論者の日本の学者は「多文化共生」という言葉を好んで使う。「民族」というリアリティのある言葉は絶対使わない。いっぽう、現実論者の私は在日韓国・朝鮮人政策や移民政策を論じる場合、「多民族共生」という外国人社会に根付いた言葉を専ら使ってきた。「多文化共生」という抽象的な概念

をもつてしては、生身の人間であるマイノリティの本質を的確にとらえられないからだ。私は「民族とは共通の言語・文化・意識を持つ人の集まり」と理解する。民族という概念を用いて初めて民族と民族の葛藤や異なる民族間の共生が現実の課題に上ると考えている。

「文化」とは何か。学問的には「文化とは、その人間集団の構成員に共通する価値観を反映した精神活動のすべて」と定義される。政治・経済・軍事・技術などと対比して「精神文化」という言葉が使われることもある。具体的には「宗教・言語・芸術・生活様式」がその中心的概念とされる。

外国人の受け入れとの関係で言えば、「外国人の持つ宗教心と日本人の持つ宗教心の共生」とは一体何を意味するのか、古い考えの持ち主の私にはよくわからない。有史以来、世界の諸民族は主として宗教や人種の違いに基づく戦争を繰り返してきたが、それをどう理解すればいいのか。「日本語を母語とする日本人と、それとは異なる言語を母語とする外国人の共生社会」とは、どういう社会なのか。実際問題として百の言語が通用する社会をつくるということなのか。それとも「単一の言語」すなわち主要民族の日本人が話す日本語のみが原則通用する社会がベターということなのか。

さらに言えば、「一つの宗教」と「一つの言語」でまとまる世界が望ましいのか。そ

れとも多様な宗教や言語が共存共栄する人類社会のほうが望ましいのか。それは人類の永遠の課題とすべき問題である。

一九七〇年代の私は、在日朝鮮人政策を語る場合、「文化は日本人とそれほど変わらないが、自らの民族にこだわる在日朝鮮人の実体」に迫った。当時も今も「日本人と外人の共生」についてはリアルにその姿・形を描くことができる。しかし「日本文化と外国文化の共生」については具体的なイメージが頭に浮かばない。

近年のヨーロッパにおいては「社会統合」という概念が主流になったと承知している。「多文化共生」という用語は過去の遺物になった。



# 第三章

## 身辺雜記

# 1 トロント大学での講演

私は二〇一九年二月、カナダのトロント大学において「日本の新しい移民政策」の演題で、人口危機に直面する日本の移民政策について語った。

五名のトロント大学教授、約六〇名のトロント大学の学生が私の話に耳を傾けた。講演終了後、多数のコメント、感想が寄せられた。「大変感銘を受けた」「坂中さんが提唱する人類共同体ビジョンは画期的」など称賛の言葉をいただいた。移民政策で世界の先頭を走るカナダの知的世界から評価されて私の感涙は止まらなかった。

講演の前日、世界的に著名なカナダのジャーナリストで「カナダは今の三倍の移民を受け入れるべき」と主張する著作があるダグ・サンダース氏の取材を受けた。私は「日本の移民国家ビジョンの特色」「カナダと日本が協力して世界の移民政策を牽引していくことの重要性」について語った。

話を終えて意気投合した。別れに際してサンダースさんは、カナダの有力紙「**GLOBE AND MAIL**」のコラム欄に「坂中英徳移民政策論」を書くこと約束した。そして同年二月一五日の同紙の社説にサンダース氏の手になる「世界は移民に壁を築く。日本は移民に扉を開く」と題するすばらしい記事が載った。

初めてのカナダ訪問で私は真の友人ができた。「移民政策」という共通のテーマを通してカナダの知識人と日本の知識人は緊密な関係を築けると改めて思い知った。

## 2 人のやらないことばかりやった

五〇年の職業人生を振り返ると、人のやらないことばかりやってきたように思う。在日韓国・朝鮮人問題にはじまり、北朝鮮帰国者問題、興行入国者問題など困難の課題と取り組んだ。現在は移民国家の創建に挑んでいる。平安時代から続く移民鎖国という日本最強のタブーとの闘いである。アンタツチャブルとされる問題への私の挑戦はとどまるところを知らない。最近では人類共同体社会の創造に全精力を傾けている。

だれもが恐れを抱いてさわるうとしない問題と正面から向き合ってたよかつたと思う。私の独壇場の世界であつたから自作自演で心のままに演ずることができた。だれからも邪魔をされることがなかったから白紙に国家百年の大計の設計図を思い通りに描くことができた。大願成就に至っていないものも多々あるが、総じていえばゴール近くまで来たと確かな手応えを感じる。



無論いいことばかりだったというわけではない。問題解決に当たって世論の支持を獲得することができなかった。問題を発見し、政策提言を行ない、政策の実現にとめたが、大多数の国民は移民問題に無関心であった。それどころか極右と極左の双方から猛烈な攻撃を受けた。孤立無援の闘いが終わったあとには悪戦苦闘したときの苦渋の思いだけが残った。問題を解決したという達成感を感じることはなかった。国民と喜びを分かち合うこともなかった。因果な性分としか言いようがない。

どれもが難問中の難問であったから問題解決までに気の遠くなるような時間がかかった。北朝鮮にいる日本人妻および北朝鮮残留日本人の救出は半世紀を得てようやく解決の糸口が見えてきた。移民国家日本の建設については一二〇〇年来の移民鎖国の呪縛が解かれて国民的議論が始まった。

さてこれから私は何をしようか。残された時間は少ないから未解決の二つの仕事に専念する。北朝鮮残留の日本人妻等の帰国問題と移民立国の問題に決着をつけたいと思う。

### 3 「小さな日本」か「大きな日本」か

私の移民政策理論の発展の歴史を概観すると、二〇〇四年一月の『中央公論』（二月号）に発表した「外国人受け入れ政策は百年の計である——目指すべきは『小さな日本』か『大きな日本』か」の標題の論文が、坂中移民政策理論の先駆的論文と位置づけられる。この『中央公論』の論文が日本を移民国家へ導く原動力となった文献である。当時、人口減少時代が間近に迫っていたから、人口減少問題の解決策としての移民政策に関する国民的議論を呼びかけたものである。

両極に位置する理念型として、人口の自然減に全面的にしたがって縮小してゆく「小さな日本」と、日本人人口が減少した分を移民人口で補って経済大国の地位を維持する「大きな日本」のふたつのシナリオを示したうえで、それぞれに対応する移民政策を論じた。

「小さな日本」の場合の移民政策は、人口の国際移動が日本の総人口に影響を及ぼさないようにすること、すなわち日本への人口移入を厳しく制限するものである。「大きな日本」の場合は、五〇年間で三〇〇〇万人近い数の移民を入れるものである。

なお、「小さな日本」を選んだ場合の外国人政策に論及した箇所において「人口急減への緊急対策として受け入れる外国人は、日本国の構成員（日本国民）になるべき人、

すなわち『移民』と位置づけるのが望ましい。いわゆる出稼ぎ労働者として処遇するよりも、将来の日本国民として相応の法的地位と待遇を保障するほうが、日本に骨を埋める決意の有為の人材をより多く確保できる」と述べている。二〇〇四年の時点で、人口減少下の日本が受け入れる外国人は、外国人労働者ではなく、将来の国民につながる「移民」であると正しく認識していた。

論文の主眼は、人口減少時代の日本の針路と移民政策に関する理論モデルを提示し、国民的議論を喚起することにあつた。しかし、この論文は一部の外国人ジャーナリストが注目しただけで、日本の知的世界からは完全に無視された。あまりにも先見性の優れた発想ということなのだろう。

二〇〇五年三月に国家公務員を辞した私は、前記論文で提起した問題をフォローする必要があると考え、同年八月に民間活動団体「外国人政策研究所」を設立した。同時に「外国人政策研究会」という名の勉強会を主宰し、月一回、研究者、行政官、ジャーナリストなどの専門家と、人口減少社会の移民政策のあり方について議論を重ねた。以後、「移民」と「多民族共生」をキーワードに移民政策論を展開し、せきを切ったように移民政策関係の著作を発表していく。

二〇二二年六月現在の移民政策をめぐる状況を見渡すと、「移民」という言葉がマス

コミや学問の世界で広く使われるようになった。「移民が人口危機の日本を救う」というキーワードが社会に定着した。

しかしあまりにも遅きに失したという感は否めない。人口秩序の崩壊が現実の脅威となった今日の日本は「衰退する社会」か「活力ある社会」かの瀬戸際にある。政府が移民鎖国の立場に固執している時ではないのである。移民立国で国論を一つにまとめる時だ。全国津々浦々から移民開国を求める声を上げてほしい。それを受けて坂中英徳移民政策研究所長が移民立国を政府に迫る。

二〇代の若者を中心に移民賛成派が五〇%を超える全国紙の世論調査の結果や、少子高齢化問題が最大の政治課題に浮上しことなど最近の移民政策をめぐる諸情勢を勘案のうえ、内閣総理大臣の責任で移民開国の決断をお願いする。同時に「移民政策はとらない」などという無責任きわまる発言は直ちに取り消していただきたい。

#### 4 論文三昧の日日

現在の私は、四年前に妻を亡くし、自宅にひきこもりきりである。人と会うことは

めつたにない。メディアの取材はすべて断っている。心をわずらわされることをするのがおつくうになった。人間嫌いの気持ちが高じたのかもしれない。引退願望が顔をのぞかせたのかもしれない。古代中国の仙人のような隠遁生活に憧れる。唯一の例外が、日課として移民政策研究所のホームページに小文を書くこと、後世の人々の参考に供するため移民政策論文を書き残すことである。文章を書くことを専らとする文筆家の生活をエンジョイしている。

ただし理想の移民国家を創るというライフワークと取り組む姿勢に何ら変化はない。日本民族の命運がかかる国難に殉じる決意を新たにするとともに、坂中構想の先途を思うことしきりである。

移民国家の道が険しくなり、予期せぬ難問が待っているかもしれない。想像を絶するプレッシャーが我が身におそいかかるだろう。移民政策に頑強に抵抗する政治の壁を突き破れるか。一人旅が続く中、無理に無理を重ねた心身が激務に耐えられるか。コロナウイルス問題が移民排斥の考えに拍車をかけるおそれはないか。人類共同体社会をつくる夢がといえるのではないか。そんな悪夢にうなされる時がある。

すると直ぐに弱気の虫を打ち消す強気の虫が出て、この期に及んであれこれ心配しても仕方ないと氣力をふるい立たせる。世界の移民政策が激動の時代に入った今こそ坂中

移民政策論の真価が問われる時だと奮い立つ。そんな私を元気にしてくれる朗報が届いた。二〇二〇年二月、人類共同体ビジョンで世界の移民政策の歴史的転換を迫る英文図書「JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION」(LEXINGTON BOOKS) が出版された。人類の歴史に新しいページを開いた坂中英徳の最高傑作である。

以下に今後の行動指針を述べる。①内外の友人との出会いがあり、多くの人の協力があって今の自分があることを忘れず、頂上まであとひとがんばりが必要と現状を厳しく認識すること。②天は移民政策に味方すると信じ、天の時を待つこと。③人種や宗教に対する偏見が少ない日本の若者の移民受け入れ能力の高さを世界の人々にアピールすること。

## 5 自画像を語る

この一〇年ほどは国家・国民への遺書のつもりで論文を量産している。「私たちは移民とどう向き合うべきか」「どうすれば人類共同体社会をつくれるか」などのテーマの論文を切れ目なく発表している。これらの著作物を日本型移民国家制度の青写真として

活用してもらえば、日本の将来は心配ないと思っている。二一世紀中に人類共同体社会が実現すると考えている。

これからの私は日本の明日を温かいまなざしで見守る。移民国家の生誕と成長を楽観的に展望する。移民政策研究所のウェブサイトの「政策提言」において内外の青少年に生きる希望を与える話をする。前途に希望が持てない時代には明るい未来のことを語る。楽天家が必要である。

一九七七年の坂中論文から四五年間、遠大な政策目標に迫り立てられる人生を送ってきた。その結果、坂中英徳はどんな人間になったのか。自画像を語る。

（ひとりぼっちの孤独感にさいなまれる人間。書齋に閉じこもる世間知らずの人間。論文を書くこと以外に生きる法を知らない人間。天涯孤独の身の人間。移民政策の世界のことしか知らない人間。自分の思想に固執する人間。妥協を絶対しない人間。良好な人間関係を作れない人間。人を疑うことを知らない人間。やることなすことすべてが批判の対象となる人間。未知なるものへの憧れの気持ちが一倍強い人間。）

このあたりで自己批判をやめる。老書生の繰り言をいくら並べても、高齢の身になると生き方を変えるのは困難である。

移民国家ニッポンのすばらしい未来を切り開くのは、地球市民の教養とセンスがある若い世代だ。頑固一徹の年寄りの出る幕はないと悟っている。

願わくは、一生の最期のひと時は、目標からも責任からも解放され、自分の知らない世界をのぞいてみたい。私はリアリストの一面もあるが、根は未知の世界に憧れるロマンチストである。

## 6 無為の人として生涯を終えたい

ここで私の夢を一つ言わせてもらいたい。人生の最期のひとときは命の洗濯をし、ライフワークから解放され、自然のもとに還りたい。若いころからの夢であった「無為」の生活を味わってみたい。ちなみに私は「無為」という言葉を座右の銘として書齋に飾っている。その字を見ながら論文を書いている。

二〇代・三〇代の時の私は読書三昧の生活に憧れていた。書庫には一九六〇年代・七



○年代に購入した今西錦司全集、梅棹忠夫著作集、宮崎市定全集、ケインズ全集、漱石全集、鷗外選集などの本がある。在日朝鮮人政策関係の資料もそろっている。移民政策関係の専門書もかなりある。中には私しか所蔵していない貴重な資料もある。

読書人生を振り返ると、一九六〇年代の学生時代と一九七〇年代の役人時代は猛烈に専門書を読んだ。「一日一冊」をモットーに乱読したことを覚えていいる。しかし、一九八〇年代以後は、本職が忙しくなるとともに移民政策関係の論文を本格的に書くようになると、本をほとんど読まなくなつて今日に至つていいる。

私は蔵書家であつたが決していい読者ではなかつた。国家公務員を退職して自由の身になつた後も読書生活は夢のまた夢で終わった。私は不器用な人間であるから読書生活と論文生活を両立させることができなかつたということである。

この一七年間、論文の執筆に追いまくられる生活を送つていいる。そして四五冊の本を書いた。筆力が最盛期を迎えた私は心ゆたかな晩年を過ごしていいる。これが人生の醍醐味というものなのかもしれない。

## 7 私家本を侮ってはならぬ

全著作のうち三五冊余は移民政策研究所発行の私家版の本である。二〇一六年以降は売れる本を書く能力に欠ける私は出版社からは相手にされない。本を書くことが生きることのすべてである私は私家版方式で書きたいと思うことを心ゆくまで書こうと心に決めた。読者は一〇〇人の知友に限られるから世論を動かす力はゼロにひとしい。それでも筆力が尽きる日まで私家本を書き続ける。論文を書くことが唯一の生きがいとなった人間の宿命である。

私家本と言っても全精神を投入した力作ぞろいである。中には『坂中英徳 マイ・ストーリー』『移民国家日本は世界の頂点をめざす』『核戦争時代の人道危機を救うのは私の使命』などの会心の作もある。

移民政策の森羅万象に迫るのが趣味の私は執筆三昧の生活をエンジョイしている。至福の隠居生活を満喫している。

二〇二一年の春に書いた『移民国家日本は世界の未来を照らす』と『人類共同体哲学入門』を読んだ小学校時代からの心の友から素晴らしいメールが届いた。元氣と勇氣をもらった。

「つぎつぎと尽きることなく湧き出でる思索と筆力。いつもながらまことに見事です。黒澤明と三船敏郎の映画「椿三十郎」「用心棒」「赤ひげ」に描かれた無骨なサムライの生き方と貴兄の姿がダブリます」

## 8 天職に殉ずる日本人

二〇二二年のいま現在、一九七五年の坂中論文以来四七年ぶりにゆったりとした気分  
にひたっている。若いときに神業かみわざのような論文を書いた責任の重圧から解放され、心や  
すらかな日々を過ごしている。

どうしてこのような境地になったのか。喜寿の年（七七歳）まで生き、何も欲するも  
のではない、何も恐れるものはない、何も心配するものはない、真の自由人になったから  
ではないか。

とうの昔に身を捨てる覚悟を決めた。坂中論文で公言した約束をはたした。日本の移  
民国家ビジョンの大綱を書き上げた。日本の歴史を画する仕事をやり遂げた。そんなふ

うに思うようになって迷いが消え、安心立命の心境に達したのだろう。

自分の実力以上の業績を成し遂げたと思うが、人知の及ばぬ力が働いて不可能を可能にするような大業を成就できたのだと思つてゐる。精魂を込めてことに当たれば一念天に通ずるといふことがあるのだろう。苦境に立つたときには天が助けてくれた。奇跡が起きて難局が開かれた。

天運と奇跡に頼つて信念を貫くような職業人生が尋常なものではないことはわかつてゐる。極左と極右の双方から脅迫され、身の危険性を伴う役人生活を過ごした。悪徳政治家や暴力団から脅されることもあつた。何度も左遷を経験した。七七までの命をいだいたのは天の配慮と感謝してゐる。

お天道様が見ているので人の道に外れたことはできないと肝に銘じ、自分なりの正しい生き方を貫いた。一〇〇〇本の論文を公にするなど公明正大な生き方を信条としてきた。理性的に考えると、日日の努力と節目での決断の積み重ねがあつて今日の坂中英徳があるということなのだろう。すべて自分のなせる業である、自分の理論を実践した結果であるというのが、合理的な見方なのだろう。ただしその場合でもなにほどこか天運の働きがあつたにちがいないと思つてゐる。

年老いた私は何事も運命と受け入れる心境になつた。天命と天職を授かつた晩年をい

かに生きるべきかについて考える時間が多くなった。日本の移民政策を牽引する天職にめぐりあつた人生に感謝している。

以下は今後の行動指針である。多くの人との出会いがあり、多くの人の協力があつて、今日の私があることを忘れず、国民と世界のひとびとの平和と幸福のために余生をささげること。移民立国の道の先導者の立場を自覚し、責任を全うすること。厳しい局面に直面しても決して逃げず、移民革命の最前線で活躍すること。

国家百年の大計であるから熟慮を重ねて発言すること。民度の高い国民が移民政策を推し進めてくれると固く信じること。移民国家ニッポンの象徴的存在として恥ずかしくない人間になるために自己研鑽につとめること。

以上、自らを戒める言葉を綴つておのれを律することにした。人生の正念場を迎えて王道を行くためである。

## 9 多彩な顔を持つ革命家

波乱に富んだ人生において多くの別名をもらった。一九七五年の『今後の出入国管理

行政のあり方について』という題の論文が「坂中論文」と呼称されたことに始まり、「日本の救世主」「鬼の坂中」などの名で呼ばれた。それら以外にも、二〇〇五年刊の『入管戦記』の帯は「ミスター入管」「反骨の官僚」と読者に紹介した。外国人ジャーナリストからも数々のニックネームをつけられた。

二〇〇九年一月の『ワシントン・ポスト』は革命的な移民政策を唱える坂中英徳を「移民政策のエキスパート」と紹介した。二〇一二年一〇月の『ジャパンタイムズ』の「移民が日本を救う」という記事は「移民革命の先導者」「革命家」と名づけた。

二〇一四年五月、日本外国特派員協会で「日本の移民国家ビジョン」の題で講演した際、同協会幹部は冒頭のあいさつで「坂中英徳氏は日本の『ミスターイミグレーション』として知られている」と紹介した。

内外の知識人の間に以上のような坂中像が定着しているからには「革命家」として生涯を終える定めなのだろう。移民革命の理論的リーダーの任を果たす必要があると胸に刻んでいる。

画期的な移民政策論文を次々と発表した実績と、政治家の圧力に屈しなかった入管時代の実績がものを言って多様な形容詞がつけられたのだろう。数多くの異名をもらい、多彩な顔を持つ坂中イメージが内外に広まっていることは私の強みである。それは移民

革命の先導役を果たすうえで威力を発揮すると考えている。

移民一〇〇万人構想は、霞が関の「異端者」が立案した移民政策ということだ。官僚たちの間に支持が広がったのだと思う。また、私につけられた異名は一種の人物評価でもある。国家公務員時代の私は政治家と喧嘩した「型破りの役人」で通っていたようだ。退官後は「伝説の官僚」と呼ばれている。

## 10 雌伏の時代の私は何をしていたのか

これは一九九五年の春の話である。法務省入国管理局入国在留課長として興行入国者の問題にメスを入れた。そこは暴力団が暗躍する闇の世界だ。私は陣頭指揮をとって一九九五年五月から翌九六年三月まで、興行入国者の「出演先」であるバー、クラブ、キャバレーなどへの実態調査を全国規模で実施した。

この規制措置に対して、芸能人の招聘者であるプロダクションや、ホステスとして使っていたバーやキャバレーなどの飲食店の経営者が猛烈に反発した。業界の意を受けた政治家まで登場し、「君はいったい何をやっているのだ。お前みたいな頑固者の役人がい

るから業界が迷惑するのだ。君は転勤したほうがいい」と圧力をかけてきた。

政治家から「頑固者の官僚」と名指しされるほどの反骨精神をつらぬいた結果、一九七七年四月の人事異動で仙台入国管理局局長の辞令を受けた。以後、福岡入国管理局局長、名古屋入国管理局局長、東京入国管理局局長のポストを歴任し、二〇〇五年三月、法務省を退職した。

雌伏の時代の私は何をしていたのか。本業のかたわら執筆活動に精を出した。その成果物として次の五冊の本を出版した。これらの代表作を書いたことが入管退職後の移民政策論の飛躍的發展につながったと考えている。

- ① 『出入国管理及び難民認定法逐条解説 新版』（共著、日本加除出版、一九九七年）
- ② 『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、一九九九年）
- ③ 『出入国管理及び難民認定法逐条解説 全訂版』（共著、日本加除出版、二〇〇〇年）
- ④ 『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、二〇〇一年）
- ⑤ 『入管戦記』（講談社、二〇〇五年）



## 11 日本を移民開国に導く二冊の英文図書

二〇〇五年に国家公務員を退職後、世界のメディアと知識人が坂中移民国家構想を絶えず応援してくれた。政府がいつまでも「日本は移民政策をとらない」などと時勢に逆行するようなことを言っていると、世界の世論が日本の移民開国を迫ることにもなりかねない。

それは日本にとって不名誉なことだ。外圧に従うことでしか自国の死活にかかわる問題を解決できない国民性と政治体質が世界中に広まる。移民政策の推進で日本の政治家がリーダーシップを発揮することは金輪際なかった。移民革命の旗振り役をつとめる私にとってそれは断腸の思いである。国家制度の崩壊が近づくこの期に及んでも日本政府の責任で移民開国を決断できないのであれば、世界の圧力に押し切られる形で政治が決断するのもいたしかたないと思っっている。

仮に世界の世論にこたえて政府が移民立国にふみきったとしても、日本国民は何らそれを恥じることはない。世界の模範となる日本型移民国家の理論的基礎を確立したのは、世界のジャーナリストが「ミスターイミグレーション」の尊称で呼ぶ坂中英徳であるからだ。その事実を世界の知性に広く知ってもらいたいと思っ、二〇一五年に英文図書

『Japan as a Nation for Immigrants』（移民政策研究所）を発行した。そして二〇二〇年。英語版論文集の決定版『Japan as an Immigration Nation』（LEXINGTON BOOKS）の真価を世界の知性に問うた。

この二つの英文著作は、世界列強の圧力に屈した幕末から明治にかけての開国や、マッカーサー憲法と呼ばれる日本国憲法の制定のときとは異なり、日本を移民開国に導く主役は日本の移民政策研究のエキスパートであることを世界中に知らしめた。

最後にこれだけは言っておきたい。近現代の日本の歴史を振り返るとき、いわゆる「外圧」が国民に幸福と平和をもたらしたという歴史的事実だ。明治の開国と昭和の憲法改正と同じように令和の移民開国も日本の歴史に燦然と輝くにちがいない。



## 第四章

内閣総理大臣の英断を期待する

# 1 『Japan as an Immigration Nation』の人類史的意義

米国の出版社から論文集が出版された。「Japan as an Immigration Nation: Demographic Change, Economic Necessity, and the Human Community Concept」(LEXINGTON BOOKS、二〇二〇年二月)である。

日本の移民政策の全体像、人類共同体思想のエッセンス、日本革命と世界革命の必然性ならびに日本の移民国家ビジョンの持つ創造性および普遍性について論じた。また、世界の移民政策の歴史的転換を各国政府に迫った。人類共同体社会の理念に基づき世界の人道危機を救うことを究極の目標にすえる雄編である。

この英語論文集は人類共同体哲学の世界展開を志したものである。新型コロナウイルス問題の深刻化に伴う国境封鎖、人種差別意識の顕在化など世界秩序が崩壊寸前の危機状況にある中、世界の知性の耳目を集める書籍としてブックレビューを果たした。「日本の移民政策」から「世界の移民政策」への展開である。

この英文著作の中心概念である人類共同体の理念は国の内外の知識人から衝撃をもつて迎えられるだろう。早速、一九七五年の坂中論文以来の知友である谷口智彦慶応義塾大学教授から「Three cheers」[A beautiful accomplishment]「快挙達成」という絶賛

の言葉をいただいた。

英語版著作は世界各国の移民政策に深刻な影響が及ぶと自信を深めている。世界の評価があつて初めて日本人の業績を評価する日本政府に移民開国を迫る決定打になるだろう。二二世紀初頭には人類共同体哲学を体現した移民国家日本が世界の移民国家の最高峰としてそびえているだろう。

一〇〇年後の日本と世界において理想が現実になると確信し、移民政策論文一筋の道歩んだ。一九七五年の坂中論文『今後の出入国管理行政のあり方について』から二〇二〇年の英語論文集『Japan as an Immigration Nation』までの旺盛な著作活動——すなわち前人未到の移民政策理論を打ち立てたこと、百年後の世界を展望する著作物を積み上げたこと、人類史に輝く英文著作を書き残したことに思いを致し、人知の及ばぬ地点まで到達したと感無量である。

## 2 一九九〇年の入管法改正は移民国家への第一歩

実は、日系ブラジル人たちが「日本人の配偶者等」や「定住者」、あるいは「永住者」

といった一般外国人がなかなか取得できない資格を手にすることができるのは、入管法に定める「在留資格」が関係しているのである。

「入管法」と呼ばれる法律ができたのは一九五一年のことである。この戦後まもなくできた基本法を軸として外国人の出入国管理を実施する体制が一九八〇年代の後半まで続いていた。

その時代の日本はまさにバブル経済の最盛期を迎えていた。日本を取り巻く内外の情勢が大きく変わり、とくに海外から押し寄せる人の流れのエネルギーが入管行政を直撃した。好景気に湧く経済界からは外国人労働者の導入を求める圧力が日増しに強まった。当然、このままでは直面する諸問題に法制面で対応できないことが誰の目にも明らかとなった。

一九八八年四月、私は法務省入国管理局で総括補佐官というポストにあった。その私に、突然、上司から「入管法の在留資格はいまの時代に合わない。外国人労働者問題に対応するため在留資格の全面的な見直し案を作るように」との特命が下った。

当時、日本の労働力不足は深刻で、外国人労働力の受け入れを求める催促が産業界から入管に向けられていた。

これを受けて、「単純労働者はまだしも、専門知識・技術を有する外国人に対しては

門戸を開く」という基本方針が法務省内で固まったのだ。

諸情勢の変化への迅速な対応を迫られたという事情はあったが、「とにかく急いでやるように」と上司が設定した期限は二週間だった。

だが、いかに喫緊の課題だと言われても、まったくのゼロからのスタートであれば、私もそれを簡単に引き受けなかったにちがいない。

じつは私には在留資格の改正案に関する「腹案」があった。一九七四年から鋭意検討を重ね、長年温めてきた「在留資格制度改革試案」が私の手元にあったのだ。それを参考に日本の入国管理制度の根幹をなす在留資格制度の全面改正案要綱を短期間で書き上げる事ができた。

今から思うと、一九九〇年の入管法改正は、入管行政の歴史的転換をもたらすものであったと言える。それまでの入管行政は、定住目的や就労目的の外国人の受け入れを極度に制限するものであった。一九九〇年の入管法改正により在留資格制度を全面的に見直し、「定住者」及び「日本人の配偶者等」の在留資格を新設するとともに、外国人が就労できる在留資格を大幅に増やした。

一九九〇年の入管法の改正に基づく在留資格制度の全面改正は、「移民」という言葉こそ使っていないが、実質的には移民国家日本への第一歩を踏み出したものと位置づけ



られると、立法の主要を務めた私は理解している。

### 3 一〇〇〇年後の人類社会を展望する

宇宙船地球号の中で人類が今日まで生き延びることができた理由のひとつに、人類の多様化つまり多様な人種・民族に枝分かれしたことが挙げられる。もともと単一の種である人類は、地球上の新天地を求めて移住し、赤道直下から極北に至る様々な生活環境によく適応し、よく生命をつないできた。もしアフリカの一地域に住む単一の人種・民族の人類のままであったなら、種としての人類は天変地異など生活環境の激変に適応できず、地球上から早々に退場していたかもしれない。

今日、二〇〇〇を超える民族が存在すると言われていて、多様な民族社会から成る人類社会は強い生命力がある。多数の民族がそれぞれ独自の文化を誇っている。この多様性に富んだ人類の未来はどうなるのだろうか。千年単位の文明的視点から人類の未来に思いをめぐらすと、さらなる多様化の道ではなく、多様な存在が相互に混血を重ねて一つの種に収斂される方向に進む人類の姿が目に見えかぶ。

ホモ・サピエンスは本来、異なる人種・民族に対し、同じ種に属する仲間として親近感や憧れの気持ちを持っている。一〇〇〇年後の人類は、自分とは異なる人種・民族のほうにひきつけられ、異なる人種・民族間の結婚が多数を占める社会が形成されている可能性がある。

人類という種社会で互いに異なる存在にひかれていく人類像。その結果として人類の多様性が次第に失われていく未来像。人種・民族・国民の垣根をこえた地球市民が多数派を占める人類社会。一九六〇年代の私は一〇〇〇年後の人類社会について空想にふけていた。

そのとき、移民政策関係の職業に就く運命が待っているとは夢にも思ってもいなかったが、そのころ抱いた空想は今も私の脳裏に焼きついている。それは縄文人の野生の思考や人類共同体社会に魅かれる私の原風景なのかもしれない。

#### 4 救国の魂がやどる移民国家創成論

国家公務員を辞めた後も、国の行く末を案ずる公僕精神を持ち続けている。私の立て

た移民国家ビジョンには救国の魂がやどっているにちがいない。それは日本国の未来永劫の安泰を願って立てた移民国家創成論である。一〇〇年後の日本と世界のあるべき姿を見すえた未来構想である。直ちに理論を実践に移すことが可能な実践的移民政策である。

問題は、私の志が詰まった移民国家ビジョンが普遍性を持ち、大方の国民の理解が得られたのかである。私の切実な思いが国民の心にどこまで届いたかについては自信が持てない。移民国家という新しい国づくりと取り組む国民の熱い思いも気魄も伝わってこない。私ひとり危機感を抱いて奮闘し、議論が空回りしているかのような虚しさを覚える日々である。長年の努力が水泡に帰すのではないかと不安を覚える時もある。

移民革命と日本革命の二つの革命を實行しないと日本の未来はないと主張しているが、少なくとも数百年後も一〇〇〇万人の規模の日本民族が生き残っていること、世界文明にとってかけがえのない存在の日本文明が地球の片隅で輝いていることを切に祈るばかりだ。

二〇代の若者と若手官僚を中心に移民賛成の声が高まっているのは心強い限りだが、国会議員、大企業の経営者、大学教授、ジャーナリストの動きが鈍い。年配の人を中心に移民が入ってくることに不安をいだく向きが少なくないのだろう。私の移民国家建国

論が多数の国民の心をつかむまでにはなお一層の努力が必要である。移民政策をとることの必要性と緊急性について各界各層の国民の賛同が得られるまで説得につとめる。移民鎖国を続けた場合の村や町の消滅など暗たんたる将来のことや、移民を受け入れた場合の社会の多様化や活性化などプラス面の数々を具体的に説明し、移民立国を急ぐべきことについて幅広い層の国民の理解を得たいと思う。

移民国家日本が発足した暁になお私が必要とされ、国民と移民に助言し、もしくは苦言を呈する役割を果たすことができれば最高の喜びである。

## 5 移民政策研究所のホームページへのアクセス数が急増中

近年、日本型移民政策に順風が吹いている。インターネットの世界で「移民」「移民政策」「移民一〇〇〇万人構想」「人類共同体ビジョン」などの言葉が普通に使われている。私は連日、一般社団法人移民政策研究所のホームページの「坂中提言」欄に小論文を投稿しているが、これを読む人の数が倍増した。最近の一日あたりのホームページへのアクセス数は五〇〇〇〇件に及ぶ。

この驚異的な数字は若い世代の移民政策に寄せる期待の大きさを如実に物語るものだ。移民政策が国会で議論される新局面を迎え、若者の移民賛成の声はネット上で爆発的に広がるだろう。それは大河の流れとなつて移民国家の立国を政府に迫る巨大パワーに発達するだろう。

時代は一〇〇〇年に一度の日本のビッグバンに向かってダイナミックに動き出した。移民革命が先陣を切り、社会革命がそれに続く。それは勢いを増して日本革命に発展する。移民革命と日本革命のオピニオンリーダーを務めるものとして、私はその中心に位置する。ただし私は移民革命を成就することに専念する。日本革命については問題を提起し、問題の解決の方向性を示すところまでは私の責任で行なう。国の未来永劫の存続を旨指し、第二の矢、第三の矢を放ち、究極の日本革命を成し遂げるのは、日本の未来を担う若い世代だ。

私たちの祖先は不屈の大和魂を發揮して幾度も国家存亡の危機を乗り越えてきた。当代の国難はその対応を誤れば日本の全面崩壊につながるかねない史上最大の危機だ。ここを先途と立ち上がる若者世代が移民革命と日本革命のダブル革命を実行し、国の一大危機を乗り切つてほしい。私は移民革命の先達として若者たちの活躍を理論面で支える。

## 6 一刻も早く移民開国宣言を

増加から減少への人口動態の歴史的転換が、国民生活、国民総生産、産業経済、財政、雇用、教育、社会保障、医療制度、安全保障など、社会全般に計り知れない影響が及ぶと繰り返し述べてきた。すでに少子化の影響が社会の各般に及んでいる。無為無策のまま現状維持を続けることは許されない。国の最優先課題として、人口減少社会に耐え抜くための政治制度改革、社会制度改革、産業構造改革、財政構造改革を積極的に推し進める必要がある。

わけても人口減少期を生きる日本国民が「移民開国」と「移民鎖国」のどちらを選ぶのか。これはまさしく日本国の百年の計を立てるほどの重要課題である。これは究極的には、日本民族が九八パーセント近くを占める現行の国家体制（単一民族国家）の基本を維持するか、それとも日本民族を中心とする多民族から構成される新しい国家体制（多民族国家）へ移行するかを決める重大事である。

どちらの道を選択しても険しい道が待っている。国と国民には確たる決意と実行力が要求される。たとえば「単一民族国家」を選択する場合には、国は国際人口移動が活発化するとともに日本人口が激減する中、海外からの人口流入を阻止するため移民鎖国政

策を堅持しなければならない。国民は経済のマイナス成長、生活水準および社会サービスの低下など、生活基盤の激変に適応する必要がある。

「多民族国家」を選択する場合には、国は多民族の社会統合を実現し、国民国家秩序を維持するという難題に立ち向かわなければならない。国民は文化を異にする多様な移民を社会の一員として温かく迎え入れ、異なる民族と共に生きるという試練を乗り越えなければならない。

この選択は二一世紀の日本国の針路と国家体制（国民の民族構成）を決めるものである。私は事柄の重要性と緊急性に鑑み、そのどちらにするかの国民的議論を早期に終結してほしいと願っている。国民の大方の意見を踏まえ、かつ、長期的・大局的見地に立つて、政府と国会が日本国の取るべき方針を速やかに決定してほしい。

「移民鎖国」を続けるという決定であれば、政府は移民の入国を制限する政策を堅持する。その場合の日本はのたうちまわったあげく自然消滅の道をまっしぐらということになる。移民開国」を断行するという決定であれば、政府は空前の規模の移民を日本社会に円滑に受け入れるための諸施策を講ずる。その場合、国民が心一つにして移民を暖かく迎えれば、日本国の存続の可能性が見えてくるだろう。

## 7 日本滅亡の責任を誰がとるのか

政府当局者に問いただしたい。この一〇年間政府が行なった人口減少対策の効果を検証してはどうか。その成果はほとんど見られず、人口問題はもはや手が付けられないほど深刻な段階にまで進んだのではないのか。

昨今の政治家は骨の髄まで移民が嫌いに見える。内閣総理大臣が「移民政策はとらない」と言い続けられれば国を亡ぼすことになるが、誰がその責任をとるのか。当代の政治家は責任逃れが当たり前になっているが、歴史の指弾を受けることを覚悟すべきだ。

あるいは政府首脳の間で移民政策は「万策尽きて最後に出す切り札」として温存するという暗黙の了解があるのかもしれない。仮にそんな空気が政界に蔓延しているとすれば、切羽詰った日本にそんな余裕はないと指摘しなければならぬ。それでは遅きに失し、日本は万事休すの最悪の事態に立ち至る。

世界の先頭を切って超少子化と超高齢化が同時進行する日本は、移民政策を喫緊の政治課題として取り上げ、移民政策論争の帰趨が明らかになったいま直ちに内閣総理大臣が移民立国の決断をしないと、消滅する地域社会が続出し、経済が失速するばかりか、財政破綻Ⅱ社会保障制度の崩壊のカウントダウンが始まると明言しておく。



## 8 環太平洋戦略的経済連携協定の歴史的意義

令和の開国劇において環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）への加盟は序幕にすぎない。内閣の移民開国宣言があつてはじめて終幕を迎える。

明治の開国は、西洋文明を積極的に取り入れた「文明開国」であつた。戦後の昭和の開国は、貿易と資本の自由化を行なつた「経済開国」であつた。今まさに国民的課題に浮上した令和の開国は、人口危機におちいつた日本を元気にする「移民開国」である。日本が千年來拒み続けてきた「人の開国」だ。

日本が移民立国を国是とする国になれば、人の移動・外交・経済・安全保障の分野で移民の出身国との関係が強化される。移民外交と移民協定が日本外交の柱の一つになる。移民開国はすなわち「日本革命」である。それは人口減少期に入った日本の究極の革命に発展する。日本人の生き方から政治・社会・経済のあり方までのすべてを根本的に揺り動かす日本革命の導火線となる。

日本がTPPへの加入を契機に五〇年間で移民一〇〇〇万人を秩序正しく入れる「移民大国」の道を歩めば、移民立国の理念を共有する主要国が環太平洋地域に集結する移民国家連合が形成される。それにとどまらない。加盟国の間で人の移動が激しくなり、

各国の国民の間に一体感が醸成され、人類の夢である「太平洋共同体への道」が開かれるだろう。

私は二〇一九年二月、カナダのトロント大学において「日本の新しい移民政策」の演題で人口危機に直面する日本の移民政策について講演した。

五名のトロント大学教授、約六〇名のトロント大学の学生が私の話に耳を傾けた。講演終了後、多数の感想が寄せられた。「大変感銘を受けた」「坂中さんが提唱する人類共同体ビジョンは画期的」などの称賛の言葉をいただいた。移民政策で世界の先頭を走るカナダの知的世界から評価され、自信をもって前に進む気持ちになった。

## 9 移民開国で日本経済は安定軌道に乗る

人口減少が激化する状況下において移民政策をとらないと日本経済は縮小局面に入る。この一〇年ほど私はそれを言い続けてきた。日本銀行がマイナス金利の導入など大胆な金融緩和策を次々と打ち出しているが、内需を拡大し、実体経済を活性化させることには成功していないようだ。当然である。政府が、経済が弱体化した根本原因の人口

問題にメスを入れずに、主として日銀の金融政策に景気回復を頼るのは土台まちがっている。

政府が移民鎖国のイデオロギーをかたくなに守るかぎり、働きの減少と消費の低迷が続くから成長戦略は立てられない。それどころか、生産人口・消費人口の激減を緩和する移民政策をとらない立場に固執すれば、日本経済は成長どころか縮小に向かう。いったん縮小軌道に入った経済を成長軌道に戻すのは至難の業である。ゼロ成長ないしマイナス成長が常態化するだろう。

それとは反対に政府が移民開国を決断すれば、まず移民に住宅を供給する不動産業や料理を提供する外食産業などへの直接投資が増える。多数の移民が入国し居住するようになる、移民は生活者・消費者であるから、衣食住関連に加えて、自動車、電気製品など高額の生活関連商品を購入する。子供の教育費も相当額にのぼる。移民の需要創出効果は極めて大きいと考えている。

中長期的には、一〇〇〇万人の移民人口が消費人口・生産人口として加わると、移民政策と経済の好循環が始まり、日本経済は安定軌道に乗るであろう。

さらに言えば、移民政策を主たる理由とする英国のEU離脱、米中冷戦の激化などで世界同時不況が現実味を増す中、世界の機関投資家は移民大国・日本の誕生を歓迎し、

る。日本への積極投資に向かうと予想されるから、ひとり日本株が急騰する局面も考えられる。



## 第五章

移民国家日本は世界の頂点をめざす

# 1 人類の救世主がゆく

人類共同体社会を創造する壮図に就いた。二〇二〇年刊の英文図書『Japan as an Immigration Nation』において人類共同体哲学に基づく人類社会の理想像を活写した。

新型コロナウイルスが猛威を振るう二〇二二年。私はコロナ後の日本と世界のあり方と真剣に向き合っている。人類がコロナウイルス問題を克服すると直ちに「人類共同体社会の創生」の方向に針路をとってほしいと願っている。

国家公務員を辞した二〇〇五年。世界のモデル国となる移民国家をつくる願望を抱いた。それから一七年がたった。世界の知性が人類共同体思想を移民国家ビジョンの極みと評価した。「人類の救世主」の名で知られる坂中英徳に人類の命運が託された。

人類共同体哲学が日本人の心を奪うのは五〇年以内と考えている。世界規模での人類共同体社会がパーフェクトに実現するは一〇〇〇年先と予想している。

時代は人種差別感情が世界中に広がる危機的状況にある。危機感がつるいっぽうの私は人類共同体ビジョンを国際社会に向けて発信中である。二〇二二年の前半。『移民国家日本は世界の頂点をめざす』『核戦争時代の人道危機を救うのは私の使命』『世界に冠たる人道移民大国が出現した』『人道移民大国の道』というタイトルの本を出版した。

人の命と同じように国の命も限りがある。文明の栄枯盛衰は枚挙にいとまがない。日本  
の精神土壤が育んだ人類共同体哲学が永遠の命を持ち続けることを願ってやまない。

## 2 政治家の不在が移民政策の推進力になった

私がかねてより当代の政治家が国の存亡の危機を救う経綸を行なうと期待してはならぬと心に誓っている。政治家がまったく頼りにならない以上は、移民政策研究のオーソ  
リテイの立場にある私が日本の国家的危機を救わなければならないと胸に刻んだ。

それにしてもこの世には不可思議なことがあるものだ。移民政策の立案に関し政界か  
ら坂中英徳の独断先行に対する非難も批判も何もなかった。与野党の政治家は移民政策  
に関し終始沈黙を守った。あるいは無関心をよそおっていたのかもしれない。政治家が  
政治家としての政見を開陳することもなかった。これは何を意味するのか。残念至極で  
あるが、国の将来を憂いる憂国の士も国の未来を切り開く賢人も日本政界には一人もい  
なかつたということである。

それでは坂中提言はそれしか日本国の選択肢はないとして消極的にでも受け入れられ



たのかというと、そうとも言い切れない。内閣総理大臣が日和見主義の先頭に立って「移民政策はとらない」と公言し、移民政策が一步も前に進まないことは国民周知の事実である。

ただしへそ曲がりの性格の私は、昭和・平成・令和の政治家の無責任きわまる態度が、移民国家日本の創建という国家百年の計の実現に大いに貢献したと考えている。与野党を問わず政治家各位から坂中構想に対する異論も批判も皆無であった。それが幸いして私が提言した移民国家ビジョンは国民の間に広く深く浸透していった。政治家各位が移民政策に対する抵抗勢力にならなかったことがプラスに働いて国民は移民鎖国のイデオロギーを軽やかに乗り越えたのである。「移民政策の世界における政治家の不存在が移民政策を前に進めた」と、後世の歴史家は歴史書に記述するだろう。

### 3 日本の政治家はリベラルである

移民政策の世界に限って言えば、排外主義思想に決しかぶれることのなかった日本の政治家は、人種差別・宗教差別・反移民の本音が露見した欧米の政治家と比べて格段

にリベラルである。私が親しく接した政治家はマイノリティの人たちに対する思いやりの心の豊かな人たちばかりであった。

最近の政府首脳の発言などを総合的に考慮すると、超少子化問題と人口減少問題を最大の政治課題と認識する政治家の間で前例のない人口危機を乗り切るには前例のない移民政策をとる必要があるというコンセンサスが形成されつつあると認識している。移民国家ニッポンの前途は洋々たるものがあると断言してはばからない。

一民間人が政治の領分と関わり、新しい国づくりにも多少の貢献ができたとすれば大きな喜びである。一言居士の自由奔放の活躍を暖かい包容力で受け止めてくれた日本の政治風土のおかげと感謝している。

#### 4 日本で移民排斥運動は起きない

私は発言すれば非難・罵倒が殺到するような問題と果敢に取り組んだ。日本の未来にとつてよかれと思うことを口にしてきた。いつも孤立無援の闘いに終始した。

反移民陣営に属する人たちは、人種差別と移民憎悪のかたまりの集団だ。私はかつて

の「進歩的文化人」を思い出す。戦後の四〇年ほど、共産主義のソ連、中国、北朝鮮を絶賛し、日本批判を展開した学者、文化人のグループである。

一九七〇年代の後半、私が提案した在日韓国・朝鮮人政策論は、当時知的世界で強い影響力を有していた進歩的文化人から袋叩きの目にあつた。「大村収容所解体」「坂中打倒」の看板を掲げるデモ行進の標的になつた。「坂中英徳は同化主義者・植民地主義者」と極左の機関紙などで執拗に批判された。歴史は繰り返すということなのだろう。半世紀後の令和の時代。ヘイトスピーチグループなどの反移民分子から「移民革命を唱える坂中英徳は反日」とののしられている。

昭和の進歩的文化人は共産主義シンパで反日本思想にこりかたまつた知識人だつた。平成・令和の反動的文化人は、国粹主義者で反移民感情の強い知識人だ。両者は祖国の運命に無関心という点で共通する。批判するばかりで対案を出さない無責任体質でも似ている。

移民反対派の人たちの中に、人口秩序の崩壊によつて経済、社会、文化が衰退していく日本の将来を憂える人はいないようだ。彼らはもっぱら国民世論を反移民に煽ることに熱心な排外主義者たちだ。しかし、異なる民族に対する寛容の心がある若い世代が、そんな極右のエスノセントリズムの考えに共鳴するはずがないと私は見ている。

移民の受け入れに賛成の若者が急増している日本においては、フランス、ドイツなどヨーロッパで広がっている移民排斥運動が起きることはない、自信を持って言える。

## 5 移民時代の行政のあり方

前例のない数の移民を適正に受け入れるためには、まず移民を社会の一員として人類同胞として歓迎する国民世論が形成されていることが前提条件だ。そのうえで世界中の人たちが日本への移民を希望する「移民に夢を与える日本」へ生まれ変わらなければならぬ。

すなわち、国籍・人種・宗教を問わず、すべての人に機会均等を保障し、実績を上げた人が評価され、社会的地位を得ることができる「世界の人々に開かれた移民社会」をつくる必要がある。同時に多様な価値観と文化を尊重する社会、いわゆる「多民族共生社会」を築かなければならない。日本が移民にとって魅力ある国に生まれ変わらなないと、世界規模で展開される人材争奪戦において敗者の憂き目にあうことになる。

移民国家の創建においては、行政の移民に対する見方、処遇のあり方が根本的に問わ

れる。外国人を主として規制の対象として見る従来の姿勢のままでは「多民族がともに生きる共生社会」をつくることはできない。原則として移民の権利を日本人と同等に保障するという基本的立場に立って、日本人と移民の融和を深めることに主眼を置き、社会の少数者である移民の立場に配慮した行政への転換が不可欠だ。

以下は、かつて在日韓国・朝鮮人の民族差別問題と悪戦苦闘した坂中英徳の提言である。

「私たちが多土済済の民族が居住する多民族国家をめざす場合には、民族・文化・宗教のちがいを原因とするいわゆる民族問題の発生を防止するとともに、様々な民族を日本国という一つの国民国家秩序の下にいかにしてまとめるかという困難の課題と取り組まなければならない」

## 6 人口と移民

国勢を決定するのは人口だ。少子化に歯止めがかからなければ国勢は衰退の一途をた

どる。人がいなくなれば人間社会は成り立たない。人口が激減すれば産業の先細りは止められない。地域社会がつつぎ消えてゆく。

人口は「出生者」と「死亡者」と「移民」の三要素で決まる。人口の自然減が激化する一方の日本では、移民人口を大幅に増やす以外に、人口の激減を止める有効な手段はないのである。移民政策がもたらす経済的・社会的効果を政府と国民が正しく認識すれば、経済は再生の局面に入る。消滅の危機を脱する町や村が現れる。

人口減少期に入った日本では、年金・保険などの社会保障、国家財政Ⅱ税収、生産・消費、こうした「人がいなくなれば必ず起きる問題」は多々ある。高度人材を少数入れたり、期間限定の外国人労働者を入れたりしても、人口問題の根本的解決にはならない。私は、技能職・専門職全般に一〇〇〇万人規模の移民を入れ、移民に技能伝承の担い手となってもらい、同時に社会の一員として税金や社会保障費の負担もお願いすることを提案している。

まずは、後継者難の農林漁業、職人的な技術を売り物にする町工場に移民を入れる。さらに、高齢社会に不可欠の介護や医療の分野にも移民を積極的に入れていく。

移民政策は「活力ある日本経済」を打ちだすのに目覚ましい効果を生むだろう。若者

が中心で消費力の旺盛な移民人口が新たに加わると、経済の先行きに対する最大の懸念材料である消費人口の激減が緩和される。移民関連産業が勃興し、移民関連の有効需要が生まれ、デフレ経済からの脱却の見通しが立つ。また、多国籍の世界人材の加入で日本企業の国際競争力が強化される。

以上のとおり、政府が大規模の移民を計画的に受け入れることを決断すれば、日本経済の抱える問題の多くが解決の方向に向かう。

## 7 財政と移民

二〇二一年末現在の長期債務残高は一〇〇〇兆円を優に超える。超少子化と超高齢化の同時進行とともに、国の抱える借金は雪だるま式に増え続ける。生産人口が今よりほぼ半減する五〇年後の日本の国民一人当たりの借金の額は想像を絶する規模に膨れ上がる。金の卵の新生児は膨大な借金を背負って生まれてくる。五人の老人に対して一人の子供という「子供が街から消える社会」に生きる未来の世代は、日本人に生まれたことを悔むにちがいない。私は当代の若い世代が子供を産むのを躊躇する気持ちが痛いほど

わかる。

政治家も官僚も、財政と社会保障制度が瓦解する地獄絵のような将来像を国民に説明することはない。だが、人口秩序の崩壊が引き起こす財政破綻の問題を直視し、今すぐ有効適切な手を打たなければ、一〇年以内に悪夢のような現実に遭遇するのは火を見るより明らかだ。

国民が自らの身を削り、各界各層の国民全員で痛みを分かち合う国民精神が形成されることを前提に、政府が社会保障と税の一体改革を確実に実施するとともに、総計一〇〇万人の移民に税金と社会保障費の一部を負担してもらうこと、それ以外に最小限の社会保障制度を守り、財政破綻をまぬがれる道はないと申し上げておく。

要するに、人口激減社会に対応するための抜本的制度改革を行なうこと、長期間の緊縮予算を組むことを条件に、入国時は一〇代・二〇代が大半の移民一〇〇〇万人が納税者および社会保障制度の担い手に加われば、何とか財政破綻を回避できる道が開かれるかもしれないということである。

その場合でも、それほど遠くない将来、財政再建に必要な若年人口をさらに増やす必要があるとして、二〇〇〇万人単位の移民を入れることの是非が専門家の間で盛んに議論されることになろう。



## 8 移民法制の二本柱——移民法と移民協定

以下に移民法制の骨子案を提案する。これをたたき台にして、政治家、行政官の間で真剣な議論をしていただきたい。

第一に、政府は世界各国の国民をバランスよく受け入れることを移民政策の基本にすえ、「日本の移民政策は公平を鉄則とする」と「移民法」（新法）で宣言する。そのうえで国別の量的規制を行なう根拠規定を設ける。それとともに、世界中から優秀な人材を計画的かつ確実に受け入れるため、多数の友好国との間で「移民協定」を締結する。

政府は、移民法の規定に基づき、人材需給の逼迫状況、受け入れ体制の整備状況、移民の社会適応の進捗状況、移民協定の履行状況、日本を取り巻く国際環境、移民政策に寄せられる国民の意見などを総合的に勘案して年次移民受け入れ基本計画を立てる。

計画の策定に当たっては、移民協定を結んだ国や、国民の好感度の高い移民の出身国に配慮し、年間の国籍別移民受け入れ枠（一国の上限は一人）を決定する。移民受け入れ計画は内閣府（移民庁）が策定し、国会の承認を得るものとする。国会の承認を求めるのは、政治家、国民の合意の上で移民政策を円滑に進めるためである。

第二に、移民法制の整備の一環として、入管法と国籍法を改正する。入管法を改正し、

移民候補となる外国人のカテゴリ（在留資格）を大幅に拡大する。たとえば、「農業」「漁業」「流通業」「商業」「建設業」「重工業」などの在留資格を新設する。また、各方面から厳しい批判を受けている退去強制手続きに関し外国人の人権に最大限配慮した法制度に改める。たとえば刑事手続きに準ずる身柄拘束手続きに改めることなど。

国籍法を改正し、主要先進国の例にならない、二重国籍を認めることにする。さらに、国籍の付与において出生地主義を一部取り入れる。すなわち、移民二世・三世に最も安定した法的地位（国民）で居住してもらうため、永住者（移民）の子として本邦で出生した者については出生の時に日本国籍を取得できるようにする。また、国籍行政と入管行政の連携を密にする。

なお、日本版奴隷制度の悪名が高い技能実習制度の全廃が適正な移民法制を確立するための前提条件であることは論をまたない。

## 9 日本のジャーナリズムの再生はあるのか

日本の移民政策は、世界の評価と日本の評価の落差が大きい。ワシントン・ポスト、

ウォール・ストリート・ジャーナル、エコノミスト誌など世界の有力メディアが坂中移民政策理論の独創性と普遍性を評価する。「ミスターイミグレーション」と立ててくれる。在日歴二五年の在日米国人の尽力があつて英語版論文集『Japan as an Immigration Nation』が出た。そして世界の知性が坂中ビジョンの人類史的意義を認めた。

総じて日本のメディアは移民政策に無関心である。移民問題と専門に取り組む記者もいない。この一二年間、坂中移民国家ビジョンは取材の対象にならない。それをいいことに私は、移民政策と入管法に不案内の日本のジャーナリストの取材をすべて断つてゐる。

私が取材に協力した世界のジャーナリストたちは、日本が直面する人口問題の重大性と、その有力な解決策としての日本型移民政策を評価し、坂中移民国家ビジョンを繰り返し報道する。もとより私の英語版の著作を熟読している。

他方、入管法や移民政策に関する専門知識に欠ける日本のジャーナリズムは、日本の最優先の国民的課題である移民政策のあり方についての的を射る報道ができない。そればかりか、ネット世界において若者の間で移民政策論議が盛り上がっているというのに、時代の動きが読めない全国紙やNHKはいまだに「移民」という言葉も「移民政策」という言葉もその使用をためらっているありさまだ。また、全国紙は「単純労働」という

グロテスクな差別用語を使って反移民の世論形成に一役買っている。移民政策に消極的なNHKは日本版奴隷制度Ⅱ技能実習制度を持ち上げている。NHKは悪徳雇用主と奴隷労働者との共生関係が成立するとても考えているのか。公共放送としてあるまじき態度だ。

国民世論を正しい方向に導く見識もジャーナリスト魂もない日本のジャーナリズムの再生はあるのか。断じて否である。政府の御用新聞と、政府の考えを垂れ流すテレビが主流になると予想する。

インターネットの時代、日本のジャーナリズムが生き残る可能性は薄いと見ている。もつとも主要メディアが反移民の立場をとることはないと考えている。排外主義や移民拒否のスタンスをとることは良識派の国民の反発を招くばかりか、日本の移民開国を待望する世界の世論を敵に回し、日本のジャーナリズムの死を早めるからだ。

日本の報道機関が来るべき移民開国の歴史的瞬間をとらえる見識がなく、「移民政策はとらない」という立場の政府の顔色をうかがう姿勢のままだと、移民国家への歴史的転換は、坂中英徳移民政策研究所所長の大車輪の活躍によって国民的議論なしで実現する運びとなろう。移民政策研究所のホームページに投稿したエッセイや渾身の力を込めて書いた英文著作を読んで移民政策に共鳴した若者世代が決起する形で移民国家日本は

生まれるべくして生まれると考えている。いかに頑迷固陋の政治家といえども日本の未来を担う若者たちの声には耳を傾けざるを得ないからだ。

話題を変える。大願を抱く私は、千年に一度の日本革命を国民の圧倒的多数の支持に基づく「国民革命」として成功に導きたいと考えている。移民受け入れに賛成の国民的コンセンサスを形成し、移民国家へ自然体で平和的に移行するというものである。しかし、主要メディアの協力が得られなければ私の夢はかなわない。特に活字メディアの奮起を促す。思い切った紙面の刷新をお願いする。日本列島の全域から移民の助けを求める国民の悲鳴で紙面を埋め尽くしてほしい。高齢者の多くが見るNHKも若者の激減で村落が消滅危機にある地方の惨状を繰り返し報道してもらいたい。

人口減少問題への対応が国民的課題に急浮上し、移民政策をめぐる状況にも歴史的な変化が起きようとしている。二〇一九年四月、超小子化・超高齢化問題を最大の政治課題と位置づける政府は、法務省の外局として出入国在留管理庁を設置するとともに在留資格(外国人の受け入れ範囲)を大幅に拡大するなど移民立国に向けて着々と布石を打っている。内閣総理大臣が「在日外国人と日本人の共生社会」の実現を語る時代が到来した。移民開国という国の大方針の決定で政府に遅れをとるようでは日本のジャーナリズムの存在価値はないと言わなければならない。遅きに失したがせめてもの社会貢献として、

日本のメディアの総力を挙げて正しい移民の受け入れに関するキャンペーンを張ってほしい。

移民政策に関する世論の動向を注視している政府もメディアの新しい動きを歓迎するに違いない。

## 10 世界は移民に壁を築く。日本は移民に扉を開く

二〇一六年という年は、ドナルド・トランプ前米大統領の登場に端を發し、移民問題で世界の混迷が深まり、世界が激動の時代に入った年として世界史に刻まれであろう。これから新しい世界秩序の形成に向けた動きが各方面から出てくるだろう。その場合、もう一つの文明の旗頭である日本が新世界秩序をつくる重責を担う必要がある、と私はつとに主張している。

これまで世界の移民政策をリードしてきたアメリカは「人種のるつぼ」との定評があったが、人種間の融合どころか、白人至上主義団体と黒人至上主義団体の対立・抗争が激しくなる一方だ。トランプ前米大統領の人種差別的発言の数々がアメリカ社会の人種差

別の根深さを白日のもとにさらした。

西欧文明は結局のところ、白人至上主義者と、キリスト教という一神教を信仰する人たちがつくった偏見ありありの文明なのである。自分たちの信じる宗教が絶対で正しい。ほかの宗教はすべて邪教である。そういう独善的な考えが西洋人の精神の根底にある。これまでは経済力と軍事力で圧倒的な力の差があり、移民の受け入れにも比較的寛大であった。ところが、経済が行き詰まり、軍事面でも絶対的な存在感が失われ、白人ファーストの西洋人の本性が現れたのである。

世界各地で人種対立と宗教対立が激しくなるなか、日本文明は人種・宗教を理由に迫害されている人々のために何ができるのだろうか。

そもそも日本人の民族性は、人種や宗教の違いはたいしたことではないと考えるものである。地球上に存在するすべての生命体に甲乙はないと考えるのが日本人だ。私たちは八百万やおよろずの神々を信仰し、自然との一体感をいだき、動植物にも仏心があると考える。人種観についていえば、たとえば白人と黒人の間に優劣はないと考えるのが大方の日本人である。

以下は、日本の若者たちと移民政策をテーマに議論を重ねた私の感想である。「日本の若者は、その人がどこの国から来たのか、どんな人種・宗教なのかは問題ではないと

考えている。問題はその人が日本で何をしたいのか、何を行なったのかである」。そのように考えていると推察する。

心の広い若者がリーダーシップを発揮する移民国家・日本が、人類共同体哲学を基本理念とする日本型移民政策の旗を掲げて世界に打って出れば、日本の移民政策は西洋人至上主義が精神の根本にある欧米の移民政策への有力な対抗軸になると考えている。

さて、歴史をさかのぼると、西洋と日本では移民に対するスタンスが正反対のものであったことが直ちに明らかになる。

西欧における移民の歴史は、アフリカの黒人を奴隷として新大陸に強制的に移住させた原罪を背負っている。これは世界人権史に残る汚点である。そのうえ、現在の欧米諸国は移民の力を借りなければ経済と社会が成り立たない状況に追い込まれている。

明治以後、日本が模範としてきたヨーロッパ文明、アメリカ文明とはいったい何だったのか。移民政策に限定して言えば、人の道と正義に著しく反するものであった。それにたいして、和の心が豊かな日本人に生まれたことを誇りに思う移民政策研究所所長が提唱する移民政策は、移民を人類同胞として温かく迎えるものである。

日本は古来、「和をもって貴し」（十七条憲法）を国の根本理念としてきた。

飛鳥の時代（六世紀末から八世紀初めまで）は、今の言葉でいえば「多民族国家」の



時代で、縄文時代・弥生時代から居住していた先住民族、朝鮮半島や中国大陸から新たに移住してきた民族、南方地域から黒潮の流れに乗って渡ってきた民族など、様々な民族が日本列島に住んでいたと考えられる。その後は令和の今日まで、太古の昔から日本各地に居住する人々は、大量の異民族の流入も外敵の侵入も受けなかった歴史の幸運にも恵まれ、民族の融和を旨とする「和の精神」を長い時間をかけて熟成させてきたと認識している。

先祖代々の和の心が遺伝子として刻まれている現代の日本人の心に異なる民族を「夷狄<sup>いてき</sup>」とみなす観念もない。漢民族が抱く「中華思想」もない。異なる民族に対する排外的感情も優越的感情も欧米諸国と比べて希薄である。

「全人類はみな同じ人間である。私たちは世界の人々を平等の精神で受け入れる。おもてなしの心で移民を歓迎する」と、内閣総理大臣が世界の人々に約束してはどうか。移民国家ニッポンが、人類共同体社会の理念を掲げて世界に打って出れば、それは異なる宗教に対する偏見と白人至上主義の考えが根本にある欧米の移民政策の退場を迫るものになるだろう。

移民政策に関する思想の根本的な相違が分岐点となって、西洋文明の時代から日本文明の時代へと、世界文明の潮流に変化が起きる可能性もある。

## 第六章

人事を尽くして天命を待つ

# 1 移民革命と日本革命の二つの革命が必要

私は二〇〇五年から二〇二二年まで一貫して、日本の歴史に類を見ない規模の移民受け入れを訴えている。しかし、五〇年間かけて一〇〇〇万人の移民を入れても、日本の総人口が三〇〇〇万人も減るといふ厳然たる事実を正視すべきだ。三〇〇〇万人の人口減が、政治・経済・財政・社会・国民生活・教育制度・安全保障体制・防災体制など各般に及ぼす影響は空前絶後のものになる。

日本が世界有数の移民大国になっても、若年人口の減少と高齢人口の増加による人口秩序の崩壊が避けられない以上、たとえば必要な人員の確保が困難になった自衛隊・警察・消防など国の安全保障体制・防災体制の根幹が揺らぐことになるのは必至だ。財政破綻の現実化、小中高等学校・大学の廃校、社会保障制度の全面崩壊などの重大問題が噴出することも避けられない。

三〇〇〇万人の人口減に耐えられる社会をつくるためには、史上最大規模の移民を迎える移民革命に加えて日本社会全体を根底から改める社会革命が不可欠だ。要するに日本史上初の日本大革命が必要ということである。

換言すれば、このふたつの革命を同時に成し遂げて初めて日本社会の存続の見通しが

立つということだ。移民革命と日本革命を国民の総意で実行すれば、たとえば年少人口の激減で瀕死状態にある農山村社会の一部が奇跡的によみがえる可能性が出てくるということだ。たとえ一〇〇〇年に一度の天変地異に見舞われても犠牲者を最小限に抑えることができるということだ。

令和の時代を生きる私たちは、明治から平成まで続いた人口増加期に形成された価値観・政治の仕組み・防衛体制のあり方から大学制度・刑事司法制度・交通運輸制度などの各制度を全面的に見直し、居住者人口が激減する社会に見合った国に移行する必要がある。私の言う「小さな日本社会」への歴史的な大転換である。その場合、日本史上最大レベルの革命を成し遂げる覚悟が国民に求められることは論をまたない。

これは国の存亡のかかる歴史的な大事業である。その困難さのレベルはむろん移民一〇〇万人の受け入れの比ではない。民族と国籍、世代と官民の垣根を越えたオールジャパンの力の限りを尽くして初めて日本の未来に薄日が射すということだ。

## 2 世界の人々を和解に導く人類共同体思想

私の移民政策理論の進展を温かく見守ってくれた海外の友人たちは、移民国家の理想像の創作と人類共同体社会の創生を両輪とする移民国家ビジョンを坂中移民革命思想の到達点と評価する。

和を尊ぶ日本精神の神髄といふべき人類共同体思想が世界文明の新地平をひらく夢を持ち続ける。近未来のいつの日か、平和の心をはぐくむ日本の精神土壌で育った人類共同体思想が、世界の人々を和解に導く希望の星としてきらめく時代が訪れると確信する。

二一世紀のいま現在。世界の大半の人々が、東洋の孤島に住む坂中英徳が提唱する人類共同体の理念を、実現不可能のユートピア物語と考えているであろう。しかし、多神教の世界に棲む日本人が真つ先に人類共同体社会を打ち立てるといふ私の信念は確固たるものだ。

異なる民族と宗教に対する精神的許容量が大きい日本人は、人類社会がかかえる民族対立と宗教対立を円満に解決するノウハウを持っている。森羅万象に神がやどると考える日本人はすべての民族・宗教と公平無私につきあう稀有の存在である。世界各地で燃え上がる民族感情と宗教感情を和の心でしずめ、民族問題と宗教問題を平和的に解決す

る潜在能力が日本民族のDNAとして備わっている。またそれは全人類を和解に導く世界平和哲学である。地球上に存在するすべての人種・民族・宗教はひとしく平等であると考え、私たちは、戦争のない世界を創るといふ人類史的使命を帯びる立場から悠久の世界平和を目標に掲げて一路まいしんする。

### 3 世界の碩学が英文著作の独創性を絶賛

二〇二〇年二月、英文著作の最高峰『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』が出版された。この本の推薦文を書いた二人の大学教授が坂中英徳の人類共同体哲学の持つ創造性と普遍性を評価した。身に余る光栄に浴した。

私の究極の夢である人類共同体社会の創造は、世界平和を願う人類の悲願だ。世界の有為の若者が未来永劫チャレンジするだろう。私の希望を言えば、唯一の戦争被爆国の日本の若者がその先頭集団を走ってほしい。

今日の世界は人類の全滅に直結する大量核兵器の存在が現実の脅威となる時代に入った。核兵器の使用が現実味を増した時代を象徴する政治家がウクライナ制圧に乗り出し

たプーチンロシア大統領だ。人類共同体社会の成否に人類の命運がかかることになった。これを坂中英徳の一場の夢とすることは人類の良心が決して許さないだろう。

日本の移民政策研究所の所長から人類総員への衷心よりのお願がある。悠久の人類史で蓄えた各民族の英知を結集し、あまたの戦争の歴史から学び、人類は一つの原点に立ち返り、人類総がかりで核戦争の阻止と人類共同体社会の樹立に取り組んでいただきたい。

#### 4 日本の若者は人類史的課題に挑戦する

人口秩序が全面崩壊する時代が刻々迫る中、若い世代を元気にする国家目標がある。夢も希望も持てない未来が待っている若者のチャレンジ精神をかきたてる国家ビジョンを提案する。若者がリーダーシップを発揮して理想の移民社会を築くというものだ。日本文化に憧れる世界の若者と、日本文化を愛する日本の若者がこころを一つにし、日本人の和の精神が詰まった和風の移民社会を創造する。

日本の未来を担う若い世代が移民と手を携え、世界の先頭を切って人類共同体社会の

創成に挑む。これこそ閉塞感にさいなまれていく令和の若者の最高の目標ではないか。

それは、日本と世界の若い世代が新しい生き方を模索する道でもある。日本の若者と世界の若者が真摯な態度で向き合えば、心の許容量が大きい日本人と、日本人が大好きな移民が心一つにし、人類の悲願である平和・友好・共生の人間関係を築けると確信している。

近年、私を訪ねてくる大学生、高校生、中学生がとみに増えた。二〇代のエリート官僚の卵も若手のジャーナリストも移民政策の勉強のために来る。彼らも彼女らも事前に移民政策研究所のホームページで政策提言や電子書籍を読み、日本型移民国家ビジョンのエッセンスを理解している。「若い世代の力を結集して人類共同体社会を作らないと私たちの明日はない」「困難な国民的課題であるからこそ挑戦のしがいがある」「日本型移民政策の提言に賛成。坂中移民政策研究所所長の志を引き継ぐ」などと抱負を語る。

最近の私は、日本の若者の夢がかなえられる時代が視界に入ったと実感する。それを明快に示す根拠がある。二〇二二年の移民政策研究所のホームページの「政策提言」への一日当たりのアクセス数が五〇〇〇件をこえた。コロナ病原体の惨禍に見舞われている最中、これは驚異的な数字だ。坂中英徳の移民政策理論に関心を寄せる人たちがこれだけの数にのぼることは驚きである。若者を中心に国民の多くが移民政策を支持する立



場を鮮明にしたことを雄弁に物語るものだ。平安時代から続く移民鎖国のタブーが完全に解かれたと認識する。

移民国家の建国に生涯をかける私は、移民賛成の世論の高まりを受けて移民立国を政府に迫る。移民政策のパイオニアの責任を果たした私は、世界の頂点に立つ移民国家の樹立を国民に訴える。

この大詰めの仕事は多数の国民の協力を得て成し遂げたい。特に若い人たちの力を借りたい。若者を中心に国民の圧倒的多数が移民受け入れに賛成というところまで世論を盛り上げ、民主的・平和的な方法で移民国家を打ち立てたいと老革命家は意気込む。

国民が新しい国づくりに積極的にかかわることなしに、つまり歴史の必然や外圧によつてなし崩し的に移民社会へ移行することになれば、現世の人にも後世の人にも悔いが残る。国民が燃えるような精神の高揚を感じることもない。歴史的な仕事に参画したという達成感も得られない。新しい国づくりに必要なエネルギーも生まれない。

移民国家を創るという千年に一回の大舞台で主導的役割を果たすのは国民だ。なかなか年金制度も社会保障制度も崩壊寸前の時代が待っている一〇代・二〇代の若い人たちだ。人口秩序を正すのに必要な移民政策をとることの賛否について議論を尽くし、日本人の心がこもった移民社会の創造に若い世代の全員が参画し、人類共同体社会の創成

を究極の目標に掲げて力強く前進してほしい。人類史的課題にチャレンジする日本の若者は、身近な存在の移民への思いやりの心と人類愛をかねそなえた地球市民へ成長するだろう。

## 5 移民国家ニッポンの未来図

国家公務員を辞した二〇〇五年の春。新しい職に恵まれなかった私はボランティア活動家として「人口崩壊に伴う国家非常事態を革命的な移民政策で乗り切る」という目標を立てた。実務家が中心の欧米の移民政策の専門家とは目的意識も発想もスケールも異なる。移民政策にかける心意気でも温度差がある。私は退路を断って移民立国に挑んだ。長年の努力が実った。二〇二〇年二月。英文著作『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』(LEXINGTON BOOKS、二〇二〇)において人類共同体論を世界の知性に提案した。

世界に類のない移民国家ビジョンを提唱しているだけでない。日本の国家目標として世界初の人類共同体社会の樹立を提案している。私たちは人種・民族・宗教・国籍の異なる人たちが人類同胞として共に生きる社会の実現を国家目標に掲げる。一〇〇年の歳

月をかけて国のかたちを人類共同体社会に作り変える壮大な国家ビジョンだ。

私の夢はとどまるところを知らない。世界中の国々で人類共同体社会が創生される夢を抱いている。日本の精神文化の粋を集めた人類共同体哲学が世界の人々の心をとらえ、地球規模での人類共同体社会と世界平和体制が実現する二〇〇年後の世界が視界に入っている。

私たち日本人は、移民国家日本が世界のモデル国となって世界の移民政策の根本的変革を迫る。移民排斥運動の高まりや反移民を唱える極右政党の台頭など人道主義の精神に著しく反する現代世界のあり方を根本から問いただす。

日本政府が独創的な移民国家ビジョンで世界の頂点をめざして歴史的な第一歩を踏み出せば、移民国家日本の基本理念と根本規範は世界各国の模範になるはずだ。とりわけ国民の間に人種差別の感情と排他的な考えが顕著に見られる伝統的移民国家に深刻な影響が及ぶと見ている。

移民立国の必要性について道理をつくして説明し、誠意をこめて正論を語り、正義にかなう生き方を貫けば日本の未来の展望が開けると信じて命をつないできた。世界の模範となる移民国家ニッポンをつくる夢を持ち続けてきたから健全な精神を持続してこられたのだと思う。現在の私は澄み切った心境で執筆三昧の生活を満喫している。

五二年間、国家的課題の最前線で活躍した坂中英徳の孤高の闘いの時代は終わった。世界最高峰の移民国家ビジョンの完成を見た。それが功を奏して移民鎖国という強固なる岩盤が崩壊した。リベラル国民と政治家が心を一つにし、一人の犠牲者も出すことなく満場一致で移民革命を成し遂げる可能性が生まれた。

二〇二二年の春。私の主要著作を読破した若者世代から「目から鱗が落ちた」「人類共同体哲学は真の意味での世界平和哲学」「人類共同体社会を創る以外に人類の生き残る道はない」「坂中さんが提唱する人類共同体思想はノーベル平和賞に値する」などの感想文が届いた。NHKの若手記者たちが坂中英徳著作集を教科書として移民社会のあり方について勉強していると聞いている。私の主要論文集を読んだ入管の若手行政官たちが入管行政の刷新を図ると熱い思いを語る。移民社会の理想像を求めて決起する若き精鋭たちの胎動を感じる。

時は移って国際人口移動（移民）が最盛期を迎える一〇〇年後の移民国家ニッポン。人類共同体哲学の発祥の地の日本は、世界中の若人が移住を憧れる「移民天国」として移民希望者が絶えることはない。

## 6 大きな夢を描けば美しい花が咲く

波乱に富む人生を振り返ると、孤立無援の一人旅が続くなか、解決の迫られる課題が  
つぎつぎ押し寄せてくるもの、脅迫と罵倒の集中攻撃を一身で受け止めるもの、やり残  
した仕事如山ほどあるものと要約できる。だからといって移民政策の立案一筋の人生に  
何の不満もない。なんやかんやと言ってきたが、つまるところ移民政策のあり方につい  
て思索にふけることしか能のない人間である。織田信長のような神も恐れぬ反逆児が新  
しい時代を切り開いた日本の歴史に鑑みると、千年に一度の人口崩壊時代には破天荒な  
構想力を有する人物が不可欠であると開き直りたい気持ちになる。

コロナ後の日本は革命の時代だ。国民と政治家が心をつにして国のあり方を根本か  
ら変革する時代だ。若い世代が明るい未来を展望できる社会をつくるため、私は有為の  
若者たちと手を携えて前進する。

移民政策研究所所長から内閣総理大臣へのお願いがある。移民への思いやりの心が豊  
かな若者たちに生きる希望を与えてほしい。新しい時代を象徴する国の目標を「世界で  
いちばん移民に開かれた国」としていただきたい。若い世代は寛容の心で移民を友人と  
して迎える。究極の目標は世界の若者が日本への移住をあこがれる人類共同体社会の樹

立た。

道楽のかぎりをつくす私を見守ってくれた家族から「お父さんは見果てぬ夢をおいかけている」と言われたが、私は「大きな夢を描けば美しい花が咲く」という言葉を心の支えとして生きてきた。いつの日か地球上に美しい花が咲き誇る百花繚乱の世界を訪れるだろう。

日本一のユートピアンは、二二世紀の移民総活躍時代に生きる地球市民たちの間で「二一世紀の人類共同体哲学の創始者が人類の永遠の課題に挑戦した。人類共同体哲学が世界の移民政策を一新した」と話題にのぼる時代を楽しみにしている。

## 7 人類史を塗り替える人類共同体哲学

坂中英徳の最高傑作「移民国家日本は世界の頂点をめざす」（二〇二二年、移民政策研究所）は論文人生の有終の美を飾るものだ。これまでに書いた一〇〇〇本の論文の中の代表作を網羅した日本移民政策史がここに完成した。不遇の時代が続いたが、ここに至って内外の世論が大きく動いた。坂中移民政策論が世界の頂点を極める時代は近いと

感じる。一〇〇年後の移民国家ニッポンは光輝を放っているだろう。

人口秩序の全面崩壊に伴う国家存亡の危機に目を閉ざす国民・政治家・知識人の覚醒を迫った。人類史を画する人類共同体哲学を打ち立てた。地球規模での人類共同体社会の創生を視野に入れた雄大無比の世界ビジョンである。

移民政策一本の道を歩んだ。五五冊余の力作をものにした。すべて自分の頭から絞り出した思想・哲学だ。中には人類共同体思想のような移民政策理論の奥義をきわめるものがある。

二〇二二年二月のプーチンロシア大統領の「ウクライナ侵略」と「核戦争も辞さない発言」を契機に、人類共同体思想の創始者の立場にある坂中英徳に世界の目が注がれていると感じる。誠に恐れ多い使命を授かったものだと思う。どこまでできるかわからないが、死を迎える日まで人類共同体哲学の啓発活動に邁進する決意である。

## 8 坂中ドクトリンが核戦争時代の人類の命を救う

日本の知的世界において人類共同体思想は言葉のはしにものぼらない。人類の未来を

展望する坂中移民政策論は日本が当面する直近の問題にしか頭の及ばない学者やジャーナリストにとっては想像を絶する思想なのだろう。他方、世界の知的世界においては「地球規模での人類共同体社会の創造」——つまり「人種・民族・宗教の違いを乗り越えて人類が一つになる地球市民共同体社会の樹立」を提唱する坂中ドクトリンに共鳴する知識人が増えつつある。私は人類共同体ビジョンの前途に確かな手応えを感じる。

国家公務員生活を終えた二〇〇五年四月。白豪主義に象徴される白人至上主義の考え方が根強く残る欧米の移民政策の轍を踏んではならぬと固く誓った。そして西洋とは異なる日本独自の移民政策理論の構築を目ざした。以後、日本人の感性に訴える論文をひたすら書いた。そして二〇二〇年二月、人類共同体社会の創造という日本人の夢が詰まった移民国家ビジョンを世界の識者に披露した。

[Japan as an Immigration Nation: Demographic Change, Economic Necessity, and the Human Community Concept] (LEXINGTON BOOKS' 110110) だ。

この本の眼目のセオリーは副題の「the Human Community Concept」(人類共同体の概念)である。反移民の声の異常な高まりが見られる欧米社会が、人類共同体社会の創造という人類史を画する坂中ビジョンにどのような反応を示すのか興味がある。

先進国の中で唯一移民鎖国を続ける国の住人である私がなぜ人類史に輝く理想を掲げ



て世界に打って出たのか。一〇〇年後の世界の姿を想像すると、「人類は平等で一つ」という人類像を抱く日本人は人類同胞意識を持つ地球市民に変身し、人類共同体社会を創る可能性がある。いっぽう宗教と人種における優越的感情が本性としてある西洋人が人類共同体社会を創るのは至難の業である。そのためには西洋人の心に染みこんでいる優越的・排他的な民族性を拭い去る必要があるからだ。以上の洋の東西の精神風土の違いが私の脳裏に焼きついている。

人種や宗教に対する偏見が西洋人と比較してあまり見られない日本国民が世界の先頭を切って人類共同体社会を樹立するという私の信念は微動もしない。戦後の在日朝鮮人政策に顕著に見られるように、坂中英徳の思想が濃厚に反映された日本の移民政策は少数民族問題を円満解決に導いた偉大な実績を誇る。日本語という和の心が詰まった言語環境の下で育った移民の二世以下の世代は日本社会に自発的に溶け込むと自信を持って言える。様々な民族の心を一つにする同化力の強い日本語と融和力にすぐれた日本社会の特色を総合的に勘案して世界の未来を展望すると、日本の移民政策が世界の移民政策の根本的な変革を迫り、移民国家日本が世界のモデル国として君臨する時代が訪れるだろう。

世界各地で移民が躍動する百年後には人類共同体哲学が感動の嵐を巻き起こしている

可能性がある。

## 9 二一世紀はレイシズムの問題が噴出する時代

かつての私は第二次世界大戦後の人類は人種問題を克服したと楽観的に見ていた。しかし、二一世紀のいま現在こそレイシズムの問題が噴出する時代であり、世界で頻発している人種差別の嵐を直視しなければならないと考えを改めた。それが人類の命取りにつながるという恐怖の念に襲われる時もある。

二〇二二年現在の世界情勢を概観すると、人類は新型コロナウイルスの猛威に襲われている。世界各国は非常事態宣言を発している。外国人の入国管理を強化し、国境を封鎖する方向に向かっている。それに追い打ちをかけるようにロシアによるウクライナ侵略が始まった。甚大な犠牲者を出した第二次世界大戦の深刻な反省に立って人類が築いた国際法秩序の瓦解の日が近いと予感する。

今こそ全人類が心を一つにし、人類運命共同体の理念を掲げて立ち上がるときだ。これは和の心と寛容の心が詰まった日本精神から生まれた平和哲学である。

人類共同体哲学を展開した論文集「Japan as an Immigration Nation」(移民国家日本)の著者に天命が下った。人類共同体哲学の旗手をつとめる坂中英徳は世界平和体制の確立めざし奮闘する。

## 10 米中冷戦時代の日本の果たすべき使命

ここから世紀の危険水域に突入した世界情勢に目を転じる。ロシアのウクライナ侵攻に端を発し、「アメリカ文明と中国文明」の激突、言い換えれば「民主主義体制と共産党の独裁体制」の冷戦、ひいては第三次世界大戦(核戦争)の勃発の危険性すらあると、私は現下の国際政治の動向を非常に心配している。双方とも尊大な民族であるから適当なところで折り合いをつけるのは困難と思われる。仲介役を買って出る大国も見当たらない。両者の覇権争いは行くところまで行くしかない、強い危機感を覚える。

とりわけアメリカ合衆国と同盟関係にあり、地理的に東アジアに属する日本はきわめて難しい立場に追い込まれると観念するしかない。

私は新しい世界秩序の創造において移民国家日本が中心的役割を果たす必要がある

と、かねてより提言してきた。わたしたちは日本史上初めての国際責任を果たすため、米国、中国につぐ世界第三の経済的地位を死守するとともに二〇〇〇万人規模の移民を迎える覚悟を決めるべきだ。

その場合、世界の模範となる移民政策に政治生命をかける見識と世界の安寧秩序を守る気骨のある政治家に日本のかじ取り役をお願いする。坂中英徳は人類共同体哲学のオピニオンリーダーとしての責任を全うする。

## 11 人類は地球上から姿を消す運命にあるのか？

「人類の救世主」の名が世界に轟く坂中英徳は、人類が一丸となって人類共同体社会を創る大望を抱き、一〇〇〇年後のパーフェクトな実現をめざす。

ひとりの人間が一生の間に行えることは非常に限られている。日本人の中から坂中思想を引き継ぐ逸材が輩出すると信じ、命の尽きる日まで移民社会の理想像を追い求める。志を同じくする若者たちと夢を共有し、夢の実現に一步でも近づくため努力する。

夢は無限だ。ひとつの夢の実現はさらなる夢の通過点にすぎない。最近の私は、排外

主義の考えが世界中に広まるのを阻止するため、世界のメディアと世界の知性の協力を得て、人類共同体哲学を世界の人々に向けて発信している。それが人類史的課題にのぼる日は一〇〇年以上も先のことだと予想するが、人類共同体社会の理念が世界の良心の心をとらえる時代は意外と早く訪れるかもしれないと思う時がある。

すなわち西欧文明が主導してきた世界秩序の崩壊が一気に進み、世界全体が弱肉強食の動物世界に先祖返りし、かつ大量核兵器を使用する第三次世界大戦の勃発の危険性が切迫し、二一世紀前半中に人類共同体思想Ⅱ生命共同体思想が新しい世界秩序を支える基本理念として脚光を浴びる時代がくるという考えが脳裏をよぎる時がある。それが人類社会の安寧秩序と人類の幸せにとつてどのような意味を持つものなのか、正直なところ私にはわからない。

以下において核戦争の勃発の可能性と人類共同体思想の關係に関する考察を進める。

ホモ・サピエンスという一つの生物に属する人類は、民族や宗教の相違を克服し、恒久的平和体制を築くのだろうか。それとも民族・宗教・国家の覇権を争つて核戦争を繰り返し、地球上から姿を消す運命にあるのだろうか。

悠久の人類史をたどれば、異なる民族間の戦争の歴史であったことは論をまたない。産業文明が成熟期を迎えた二一世紀の世界においても、核保有国が増える一方で、民族

問題・宗教問題に原因する戦争やテロが絶えない。今日の世界は、北朝鮮とイランの核開発問題、プーチンロシア大統領の核戦争も辞さないという暴言、ロシアと米国の戦術核兵器の開発の動きなどに見られるように「いつ核戦争が起きてもおかしくない」と、私は世界の現状を深く憂えている。万一、宇宙空間も巻き込んだ地球規模の核戦争が勃発すれば、罪深い人間が滅亡するだけではすまない。人類の極悪非道の犯罪行為の巻き添えを食って地球上の生きとし生きるものすべてが姿を消す。

ただし平和を願う心が人類のDNAにインプットされていることも事実だ。「生物の世界の長を自認する人類が、地球上のすべての生物を皆殺しにする残虐行為を断じて行なってはならぬ」と、私は人類の良心に訴え続けている。私たち人類は、生物社会の一員として、人類以外の生命体の永遠の命にも思いをいたすべきだ。

万物の霊長の叡智で盤石の世界平和体制をつくる夢を抱く私は、世界の知識人の智慧を結集し、二二世紀中の実現へ向かっての第一歩を踏み出してほしいと切に希望する。人類共同体論と並んで生命共同体論を提唱する私は、人間の狂気で人類を含む動植物を全滅させてはならぬと深刻に考える地球市民のコモンセンスにいちずの希望を託す。

地球上で戦争が絶えない根本原因は、知恵がまわる人類の性さがというべき民族精神と宗教心が排他的な性格を帯びるものに変質し、それぞれの民族が文化・宗教における覇権

を争つて戦争を繰り返すことにある。人類に属するすべて人が民族と文化と宗教の多様性を尊重し、かつ、それらの相互関係を「人類は一つ」の普遍的理念と人類共同体精神の下で共存共栄するレベルにまで人類の道義心を高めない限り、戦争のない世界は永久に実現しないと、私は世界の良心に直訴する。

これほどまで核拡散が進むと、もはや何を言っても無駄な努力なのかもしれない諦めの境地に傾くときがある。米国、ロシア、中国の核兵器開発競争は宇宙空間へと広がり、もはや人間の知性と良心の力をもつてしてはコントロールできない段階に達したのではないか。愚かなる人類は、核という文明の凶器を使って人間同士が殺し合う、自滅への道を歩み始めたのではないか。そのような恐怖の念に襲われる時がしばしばある。

そんな悪夢から目が覚めたとき、ロマンチストの一面がある私は、日本人が中心となつて究極の世界平和に挑戦する夢をいだき、今こそ人類史的課題に立ち上がる時だと奮い立つ。そのときには、「自由と博愛の西洋文明」と「寛容と平和の日本文明」とが合体して創成される新世界文明の時代に思いをはせる。そのいっぽうでリアリストの一面がある私は、仮に核戦争のない平和の時代が訪れるとしても、それは第三次世界大戦（核戦争）で億単位の人的犠牲を払った後のことではないかという恐ろしい考えが頭に浮かぶ。

ここで「万物平等思想」と「世界平和思想」を打ち立てた坂中英徳の発想の原点につ

いて触れておきたい。

『人類はあまねく平等である。万物はひとしく生きる権利がある』と考える日本人は、動植物はもとより様々な民族や宗教と上手につきあうノウハウを身につけている。世界各地で燃え上がる民族問題・宗教問題を冷静かつ平和的に解決する能力を有している。

日本人は古来、人間はもとより動物、植物、鉱物など自然界に存在するあらゆる物と心を通わせ、自然と親しみ、そこに神がやどると信じている。自然と自己を同一視する万物平等思想（アニミズムの自然観）を抱いている。それは人類を含む万物の共生につながる自然哲学である。人類を永遠の存在に導く平和哲学である。万物の霊長の思いがった考えを戒める日本人の叡智である」

## 12 人類共同体哲学の創始者の出番が来た

ロシアのウクライナ侵略など世界情勢が緊迫の度を増す中、移民政策で世界をリード



する立場にある私が最優先で取り組むべき使命は何か。反移民勢力が勢いを増す世界の危機的状况を鎮めることだ。世界の識者が「ミスターイミグレーション」と命名する坂中英徳が先頭に立ち、世界各地で燃え上がる人道危機に立ち向かう。

核攻撃も辞さないと言言するプーチンロシア大統領のウクライナへの軍事侵攻など第三次世界大戦の脅威が迫る二〇二二年三月。人類共同体哲学の創始者として世界に知られる坂中英徳の出版が来たと言い立った。英文書籍『Japan as an Immigration Nation』の根本理念である人類共同体哲学で理論武装し、プーチン大統領批判を展開しようとした。人類共同体哲学すなわち世界平和哲学は核戦争に対する反対命題として威力を発揮すると考えている。坂中平和哲学が世界平和を願う世界の人々の連帯の輪を広げる一助になれば嬉しく思う。

ここで第二次世界大戦後の国際法秩序はいま重大危機にあることを改めて強調しておきたい。プーチン氏が率いる独裁国家ロシアには曲がりなりにも言論の自由がある。選挙権が保障されている。国民の政治意識も高い。いっぽう習近平氏が率いる中国では共産党独裁体制が続いている。国民が政治家に物申すことは許されない。政治的発言をすれば厳罰に処せられる。中国は選挙権も思想の自由も言論の自由もない国であることを私たちは忘れてはならない。

戦争反対の国民世論が許されない国の習近平国家主席の中国は戦争反対の国民世論が存在するプーチン大統領のロシアよりもいつそう危険な存在であることを、自由民主主義陣営の政治指導者は肝に銘じるべきだ。

プーチンロシア大統領の暴挙後の世界は一体どこに向かうのだろうか。自由と民主主義を国是とする日本や欧米諸国が中心の自由民主主義国家連合と、共産党独裁国家中国や専制主義国家ロシアが中心の全体主義国家連合の対立・抗争が激化すると私は考えている。それだけでは終わらないかもしれない。第三次世界大戦（核戦争）の蓋然性が高まる可能性がある。万が一にも世界的規模の核戦争が起きたときには、私が主張する人類共同体哲学は絵に描いた餅に終わる。「坂中英徳が理想論を声高に訴えたが、世界の政治指導者から歯牙にもかけられなかった」と物笑いの種になる。

私は信条を絶対に曲げない頑固一徹である。命が尽きる日まで人類共同体哲学の人類史的意義を訴え続ける。それにもかかわらず核兵器を使用した第三次世界大戦が勃発し、大量の犠牲者をもたらした後には、核戦争を始めた政治家を指弾するスローガンを掲げて立ち上がる良心派のひとつと爆発的に増えるだろう。また、核戦争反対の国際世論の異常な高まりが見られるだろう。さらに言えば、坂中英徳が提唱する人類共同体哲学は世界の普遍的理念として脚光を浴びるだろう。

### 13 ウクライナ難民を歓迎する人道移民大国ニッポン

私は『坂中英徳 マイ・ストーリー』（移民政策研究所、二〇二〇年）において日本の難民政策のあり方に関して論陣を張った。

（日本は難民の受け入れ数が極端に少ない「難民鎖国」の国だと、国際社会から批判されてきた。その背景事情の一つとして、人口増加時代の日本は永住目的の外国人をほとんど受け入れない「移民鎖国」の国であったことが挙げられる。世界の「難民大国」はおしなべて「移民大国」の国である。また、難民認定率が極度に低い理由として、入管の役人が難民条約を杓子定規に解釈し、律儀に運用してきたことが挙げられる。

しかし、人口減少時代に入った日本は、大量の移民を受け入れざるを得ない。その場合、難民条約に該当する条約難民と人道上の配慮を要する人道難民を移民枠の一つに位置づけることを提案する。移民政策の一環として、「条約難民」に加えて「人道難民」を、移民のカテゴリーの一つとして政策的に受け入れるのである。

かねてより私は、人口危機を乗り切るため、向こう五〇年間で移民一〇〇〇万人

の受け入れを提唱している。その場合、そのうちの五〇万人は人道移民（条約難民および定住難民）の枠とすべきと主張している。そうしないと「難民に冷たい国」という日本イメージを払拭できないからだ。

私は二〇一五年九月、シリア難民の受け入れについて、子供、女性を中心に年間一〇〇〇人の受け入れを提言した。すると難民政策で政治家が動いた。難民鎖国に風穴が開いた。

二〇一六年一月、参議院本会議における山口那津男公明党委員長の「シリア難民の子供を日本で教育するため留学生として受け入れてはどうか」というタイムリーな質問に対し、当時の安倍晋三首相は「将来、その国を担う子供を受け入れる可能性について検討していく」と答えた。

結局、同年五月、政府は五年間で一五〇人のシリア難民の子を留学生として受け入れることを決定した。数は物足りないが、この難民受け入れ制度は日本型難民政策の成功第一号と評価できる。これを機に政府は、難民条約上の難民に該当しない者であっても人道上の配慮の必要が認められる「人道難民」については弾力的に入国・在留を認めるべきだ。〕

そして二〇二二年の春。日本の人道難民をめぐる局面は劇的に変化した。日本史に例を見ない美しい光景と出会った。プーチンロシア大統領の残虐非道の暴挙に端を発し、ウクライナ難民を暖かく迎える世論が自然発生的に形成されていたのである。二〇一六年当時のシリア難民の受け入れに苦労したことを思うと隔世の感がある。ウクライナ難民の受け入れに賛成の圧倒的な国民世論の追い風に乗って日本は「人道移民大国」として世界の表舞台に颯爽と登場した。

二〇二二年四月一日、岸田文雄首相は特使として林芳正外務大臣をポーランドに派遣した。日本政府はポーランドにウクライナ難民に関する窓口を設置し、ウクライナ難民を積極的に受け入れる立場を内外に宣言した。すなわち世界史に輝く移民国家日本の誕生である。

日本財団（笹川陽平会長）は二〇二二年三月二十八日、ロシアのウクライナ侵攻を受けて日本へ避難するウクライナ人を一〇〇〇人と想定し、一人あたりの渡航費三〇万円と、年間の生活費一〇〇万円を三年間提供すると発表した。笹川陽平氏はけたはずれの発想と力量の持ち主だ。

東京都を筆頭に地方自治体の長は、ウクライナ難民に対して住宅の提供、就職支援、子供の教育などに尽力すると異口同音に語る。

ウクライナ難民を歓迎する国民世論の形成を契機に国民が心一つにして正しい移民受け入れに邁進すれば、日本の移民政策は世界の頂点を極めるものになると確信する。移民政策のオピニオンリーダーをつとめる私は日本のウクライナ難民受け入れの世界史的意義を世界のひとびとに向けて発信中である。

一例を挙げる。二〇二二年三月、人類共同体哲学Ⅱ世界平和哲学をメインテーマとする英文図書『Japan as an Immigration Nation』を駐日ウクライナ大使に謹呈した。この本がウクライナの人々の命を救う一助になればこの上ない喜びである。

## 14 入管法の全面改正が急がれる

各方面から厳しい批判を受けている退去強制手続きを、外国人の人権に最大限配慮するものに改めるべきだ。裁判官が関与する身柄拘束手続きに改めるなど抜本的な改革が必要だ。出入国在留管理庁は発足以来の重大危機にあることを肝に銘じるべきだ。

また、ウクライナ難民、アフガニスタン難民、シリア難民、ミャンマー難民などの受け入れを円滑に進めるため、難民認定数が極端に少ないなど各界からの批判が絶えない

難民認定制度を全面的に改めるべきだ。法務省出入国在留管理庁の難民認定室を廃止し、内閣府に学者、外交官、裁判官の三者からなる難民審査委員会を設置すること、同委員会に難民調査官を配置すること。

以上の制度改革について政府において至急検討していただきたい。

## 15 坂中英徳が革命家に指名された日

私の立てた移民国家ビジョンを真つ先に評価し、世界に向けて発信したのは外国特派員たちだった。国内で暗闇状況が続く中、一筋の光を投げかけてくれた。日本の移民政策のスペシャリストが提案する移民国家の理念が世界のジャーナリストの注目の的になり、日本オリジナルの移民政策は世界で十分通用すると自信を得た。

これは二〇一四年の春の話である。私の移民国家ビジョンを評価する在日アメリカ人から、「坂中さんのように日本人ばなれしたスケールの移民政策を提案した人物が存在するのは不思議。どんな人間なのか興味がある」と言われた。そのとき、「そんなことを聞かれても自分ではわからない。そもそも『坂中英徳は何者か』などについて考えた

こともない」と答えた。その後も西洋人から同じような質問をたびたび受けた。

自分では国家の大事を成すような人物ではなく、日本人の血が通った普通の日本人だと思っている。だが世間はそのようには見てくれないようだ。「革命家」というあまりおだやかでないレッテルを貼られる一方で、一九七〇年代の坂中論文から二〇〇〇年代の移民国家構想まで、する事なす事のすべてが批判の対象になった。右翼からも左翼からも、保守陣営からも革新陣営からも、これほど全面的かつ過激な言葉で非難・罵声を浴びた日本人も珍しいのではないか。

島国根性の持ち主が多い国内では私の移民開放政策を支持する日本人は皆無に等しかったが、それとは真逆で世界のジャーナリストや知日派の知識人はいつも私の移民政策の味方であった。日本のマイノリティ問題に詳しい元官僚が提唱する移民国家ビジョンを評価した。一例を挙げる。二〇〇九年一月の『ワシントン・ポスト』は一面で坂中英徳を「移民政策のエキスパート」と世界に紹介した。

また、世界の知識人たちから、「ミスターイミグレーション」「救世主」「革命家」という恐れ多い形容詞をつけられた。これらのニックネームは、私の足跡と人となりをずばり衝くものと言えなくもない。これらの尊称は世界の識者からいただいた最高の勳章と言えらる。



欧米の知識人にとって坂中英徳は「ミステリアスな日本人」と映るようだ。政界の実力者が談合して国家の大事を決める日本社会から、世界的・人類史的視点に立って日本オリジナルの移民国家ビジョンを打ち立てた日本人が出現したことが信じられないのかもしれない。

世界の先頭を切って人類共同体社会の創造という世界平和構想を提唱しているが、その発想の原点はアニミズムの世界観を持つ縄文人（狩猟採集民族）が抱いていた平和志向の観念と基本的に同じだと思っている。移民政策のことしか頭にない不器用な日本人である。江戸時代の古武士のような古いタイプの日本人である。強いて言えば「サムライの美意識に憧れる令和の革命家」というあたりが的に近い人物像なのかもしれない。

さて、二〇一五年の夏、米国人のフリーランスライターが日本の移民政策の動向に関する取材で訪ねてきた。ジェシカ・ワイスバーグ氏は二時間の討論の終わりに、人類共同体思想を展開した英語論文『Japan as a Nation for Immigrants——A Proposal for a Global Community of Humankind』を読んで感動したと述べた上で、「坂中さんのようなスケールの大きい人物が日本に存在するのは驚き」「文明論的視点から遠大な移民国家論を展開しているが、このような論文を書いた秘訣は」「坂中さんが最も影響を受けた学者は」など、日本の移民革命を提唱する坂中英徳という「人間」に関係する質問を

連発してきた。これまで自分が何者なのかについて真剣に考えたことがなかったので答に窮した。それで、とっさの思いつきで以下のように答えてその場を切り抜けた。ちなみに、影響を受けた学者として、ダーウイン、マックス・ウェーバー、ケインズ、レヴィストロース、梅棹忠夫の名前を挙げた。

（私は日本人の中で特異な人種に属するが、海外の知識人から多くの通り名を付けられた。「日本の救世主」「移民革命の先導者」「ミスターイミグレーション」「移民政策のエキスパート」などの別名をいただいた。これらの呼び名は外国の知識人による坂中評価の象徴と言えなくもない。以上のようなニックネームから坂中英徳がどういう人間なのかについて知るヒントが得られるかもしれない。）

インタビューを終えて、『入管戦記』（講談社、二〇〇五年）と『新版 日本型移民国家への道』（東信堂、二〇一四年）を謹呈した。彼女は拝読しますと述べた。京都人の美意識に憧れる米国人が、日本の伝統的な精神風土から突然変異体として飛び出した異端児をどのように描くのか、興味がある。

ここから話題が移る。私は世界経済フォーラム主催の「移民に関する世界有識者会議」

(二〇一〇年一月二十九日から二月一日、於アラブ首長国連邦のドバイ)に参加した。この会議には、国連難民高等弁務官事務所、ヨーロッパ委員会および世界銀行の移民・難民担当の責任者を含む、長年移民政策の立案と実行にかかわってきた世界の有識者一二名が集まった。会議の目的は、リーマン・ショック以後の世界の移民政策は行き詰っているとの共通認識のもと、二〇年後の世界をみすえた新しい移民政策の理論的枠組みを構築しようというものであった。

私は同会議において英語の小論文『坂中英徳の日本型移民国家宣言』を提示し、移民政策の世界的権威に批判と助言を仰いだ。具体的には、日本が移民政策を立案するに当たっての参考意見と日本型移民国家宣言に対する見解を求めた。

すると、移民政策研究の世界的リーダーで同会議の議長を務めたデメトリイ・G・パパデメテリウ氏(ギリシヤ系米国人)から絶賛のコメントが寄せられた(二〇一〇年一月一日付けのメール)。

(あなたの論文は、私がこれまで読んだ移民政策分野のどの論文よりも新鮮で創造性に富んだものです。なぜなら、移民受け入れと社会統合という両立しがたい難問を解決しようとしているからです。提案の「言語教育、職業訓練、文化教育を行なっ

て移民を日本に迎える」という戦略は、人口統計学的なメリットとともに、若い移民に焦点を当てている点が素晴らしい。また、移民に対する永住権（究極は市民権）の付与を強調されているが、それは「日本には外国人を受け入れる責任と準備ができていない」ことを移民に理解してもらおう最善の方法です。」

移民政策理論の世界的権威は日本人の立てた移民政策のどの点を評価したのでろうか。私の想像だが、日本の知的風土に根ざした「日本型」の移民政策の持つ新鮮な発想に驚いたのではないか。

洋の東西を問わず、国家存亡の危機の時代には、あたかも将来の国民から国を救う人物として指名されたかのように偉大な革命家が現れるものである。言うまでもなく、今日の日本が直面する最重要課題は、年少人口が激減する人口崩壊の危機をいかにして克服するかだ。政府が人口崩壊を止める根本的な政策を立て、それを直ちに実行に移さないと、社会、経済、財政、国民生活の全面崩壊は避けられない。

「人口崩壊を止める根本的政策」として何が考えられるか。国家公務員を辞した二〇〇五年から今日まで一貫して私は、国民と政府が丸となって移民鎖国体制をくつがえし、移民国家体制を確立しない限り、人口崩壊＝日本崩壊は止められないと主張してい

る。しかし、私の提案に耳を傾ける政治家は一人も現れなかった。自由にものが言える。大学教授もジャーナリストも移民政策の推進で論陣を張る勇氣はない。

移民政策の展望が開けない状況が続く中、前途に光明を見いだす一つの出来事があった。二〇一二年一〇月二一日の『ジャパンプタイムズ』に「移民が日本を救う」というタイトルの記事が掲載された。この記事を書いた在日米国人のマイケル・ホフマン氏は坂中英徳を「移民革命家」と命名した。

私はこのジャパンプタイムズの記事から難関を突破する勇氣をもらった。また、これで「移民が日本を救う」という斬新なアイデアが国の内外で認知されると確信した。役人時代の私はミスター入管で通った体制派の人間であったが、これからは「革命家」という日本の精神風土になじまない名前を背負って生きていくしかないと覚悟した。

国家公務員としてのキャリアを積んだ私がなぜ移民革命の立役者に指名されたのか。新しい国造りの重責を担う日本人は移民政策に精通する坂中英徳以外に適材が不在だったからである。

「二〇一二年一〇月二一日」は、「坂中英徳が革命家に指名された日」として忘れられない日になった。

## 16 坂中英徳著作集

- (1) 『今後の出入国管理行政のあり方について』（自費出版、一九七七年）
- (2) 『今後の出入国管理行政のあり方について——坂中論文の複製と主要論評』（日本加除出版、一九八九年）
- (3) 『改正入管法の解説——新しい出入国管理制度』（共著、日本加除出版、一九九一年）
- (4) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説』（共著、日本加除出版、一九九四年）
- (5) 『国際人流の展開』（日本加除出版、一九九六年）
- (6) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説新版』（共著、日本加除出版、一九九七年）
- (7) 『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、一九九九年）
- (8) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説全訂版』（共著、日本加除出版、二〇〇〇年）
- (9) 『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、二〇〇一年）
- (10) 『外国人に夢を与える社会を作る——縮小してゆく日本の外国人政策』（日本僑報社、二〇〇四年）
- (11) 『入管戦記——「在日」差別、「日系人」問題、外国人犯罪と、日本の近未来』（講談社、二〇〇五年）

- (12) 『脱北帰国者支援は私の使命』（脱北帰国者支援機構、二〇〇五年）
- (13) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説改定第三版』（共著、日本加除出版、二〇〇七年）
- (14) 『移民国家ニッポン——一〇〇〇万人の移民が日本を救う』（共著、日本加除出版、二〇〇七年）
- (15) 『日本型移民国家の構想』（移民政策研究所、二〇〇九年）
- (16) 『Towards a Japanese-style Immigration Nation』（移民政策研究所、二〇〇九年）
- (17) 『北朝鮮帰国者問題の歴史と課題』（共著、新幹社、二〇〇九年）
- (18) 『日本型移民国家の理念』（移民政策研究所、二〇一〇年）
- (19) 『日本型移民国家への道』（東信堂、二〇一一年）
- (20) 『人口崩壊と移民革命——坂中英徳の移民国家宣言』（日本加除出版、二〇一二年）
- (21) 『全訂出入国管理及び難民認定法逐条解説』（共著、日本加除出版、二〇一二年）
- (22) 『日本型移民国家への道』（東信堂、増補版、二〇一三年）
- (23) 『日本型移民国家への道』（東信堂、新版、二〇一四年）
- (24) 『Japan as a Nation for Immigrants』（移民政策研究所、二〇一五年）
- (25) 『日本型移民国家の創造』（東信堂、二〇一六年）
- (26) 『私家版 日本型移民国家が世界を変える』（移民政策研究所、二〇一六年）

- (27) 『私家版 東京五輪の前に移民国家体制を確立したい』(移民政策研究所、二〇一六年)
- (28) 『私家版 日本の移民政策の展望』(移民政策研究所、二〇一七年)
- (29) 『私家版 坂中移民政策論集成』(移民政策研究所、二〇一七年)
- (30) 『私家版 移民国家の歴史を記録するのは私の使命』(移民政策研究所、二〇一七年)
- (31) 『日本型移民国家の世界的展開』(移民政策研究所、二〇一八年)
- (32) 『日本の移民国家ビジョン』(移民政策研究所、二〇一八年)
- (33) 『坂中英徳の移民政策案内』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (34) 『日本型移民政策論集成』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (35) 『坂中英徳・在日朝鮮人政策を語る』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (36) 『新しい入管行政のあり方』(講演録)(移民政策研究所、二〇一九年)
- (37) 『人類共同体社会』とは』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (38) 『移民国家ニッポン』の未来図』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (39) 『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』(LEXINGTON BOOKS、二〇一〇年)
- (40) 『坂中英徳 マイ・ストーリー』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (41) 『一刻も早く移民開国宣言を』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (42) 『移民と共に歩んだ五〇年』(移民政策研究所、二〇二〇年)



- (43) 『人類共同体宣言が世界の人道危機を救う』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (44) 『移民国家日本が世界を変える』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (45) 『移民国家日本は世界の未来を照らす』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (46) 『人類共同体哲学入門』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (47) 『坂中英徳移民政策論文集』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (48) 『人類共同体論の世界展開』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (49) 『増補版 坂中英徳・在日朝鮮人政策を語る』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (50) 『移民社会の理想像を求めて』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (51) 『移民政策百科事典』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (52) 『日本移民政策史』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (53) 『移民国家日本は世界の頂点をめざす』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (54) 『新版 移民社会の理想像を求めて』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (55) 『核戦争時代の人道危機を救うのは私の使命』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (56) 『世界に冠たる人道移民大国が出現した』(移民政策研究所、二〇二二年)
- (57) 『人道移民大国の道』(移民政策研究所、二〇二二年)

## 17 坂中全集は人類の未来を照らす鏡

二〇二二年二月のプーチンロシア大統領のウクライナ侵攻と「核戦争も辞さない」発言をまのあたりにし、世界は第三次世界大戦に向かって暴走し、核戦争が当たり前の時代に入るのはないかという恐怖の念に襲われた。同時に「人類の救世主」の名が世界の知識人の間に定着している坂中英徳の人類共同体哲学のエッセンスを広く世界のひとびとに紹介する必要があると思ひ立った。そして本年五月以降は立て続けに(1)『核戦争時代の人道危機を救うのは私の使命』(2)『世界に冠たる人道移民大国が出現した』(3)『人道移民大国の道』の三部作を発刊した。

最新作『人類の救世主が立ち上がるとき』において坂中英徳の思想哲学を余すところなく論じた。核戦争の脅威が高まる中、人類を人類共同体社会へ導く古典として地球市民の座右の書として永遠に読み継がれることを祈る。

坂中英徳（さかなか ひでのり）

1945年生まれ。

1970年、慶応義塾大学大学院法学研究科修士課程修了。

同年法務省入省。東京入国管理局長などを歴任し、2005年3月退職。

同年8月に外国人政策研究所（現在の一般社団法人移民政策研究所）を設立。

法務省在職時から現在まで、在日朝鮮人の処遇、人口減少社会の移民政策のあり方など一貫して移民政策の立案と取り組む。近年、50年間で1000万人の移民を受け入れる「日本型移民国家ビジョン」と、全人類が平和共存する「人類共同体社会の理念」を提唱している。2020年、人類共同体哲学を全面展開した英文図書『Japan as an Immigration Nation』を出版。現在、移民政策研究所所長。

---

## 人類の救世主が立ち上がるとき

---

発行日：2022年7月15日

---

著者：坂中英徳

発行所：一般社団法人移民政策研究所

〒133-0056

東京都江戸川区南小岩5-17-20

<http://jipi.or.jp>

※本書籍の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・改竄すること及び、有償無償に関わらず第三者に譲渡することを禁じます。

